

# 王羲之の書簡文について

福井佳夫

## 目次

- 一、尺牘の三段構成
- 二、尺牘解釈の困難
- 三、公私と雅俗の比例
- 四、尺牘の価値
- 五、書簡と尺牘の連続性
- 六、「与会稽王牋」の文章
- 七、桓温「薦譙元彦表」との比較
- 八、天は二物を与えず

東晋の王羲之<sup>おうぎし</sup>、あざなは逸少（三〇三～三六一）は書聖、つまり古今第一の書家として、中国のみならず、日本でもよく知られている。なかでも永和九年（三五三）、会稽郡の蘭亭において当時の名士たちと開催した大規模な詩会は、羲之の名を後世にまでひろめることになった。詩会がおわったあと、羲之は参会者たちの詩をあつめて詩集を編纂し、みずから筆をとって序文をかいたが、その「蘭亭集序」が後世、希代のすぐれし書跡として尊崇されたからである。

しかしながら羲之は生前、書家として、世に処していたわけではない。そもそも彼は名門、琅邪の王氏の出身である。しかも、東晋王朝の佐命の臣たる王導（二七六～三三九）の親族であり、また会稽という要地の内史（いまの県知事に相当しよう）もつとめた。それゆえ羲之は、当時では「書も達者だが、でもほんとうは政界の大立者、あの王導どのゆかりの政治家」とみなされていたことだろう。

本稿では、そうした書家や政治家としての活躍はさておき、文人としての業績に注目してみたい。この羲之、現在にのこる文学作品としては、右の「蘭亭集序」が突出して有名になっている。そのためか、それ以外の文業はあまり注目されていないが、彼には書簡の文章がたくさん残存している。「晋書」本伝に採録された書簡文（「書」や「牋」の類）をはじめ、膨大な量の尺牘<sup>せちく</sup>（雑帖ともいう。後述）の文がそれだ。これほどおおくの資料がのこっておれば、文人としての能力を判断するにはじゅうぶんだろう。そこで本稿では、尺牘もふくめた一連の書簡文に注目してみよう。そしてその文章の特徴や価値を考察しながら、それから推察される羲之の文章能力についても、私見をのべてみたいとおもつ。

## 一、尺牘の三段構成

はじめに、量的にいちばんおおい尺牘をとりあげよう。嚴可均『全晋文』には羲之の文章作品を輯録しているが、そのなかに「雜帖」とよばれる一連の短文がある（卷二十一丁卷二十六）。ここの「帖」とは、古人の筆跡を石ずりにしたものの意であり、つまり「雜帖」とは、雑多な内容をもった羲之の法帖をさすのだろう（ただし羲之の筆跡はすべて後人の模写であり、真跡ではない）。そしてその実質は、身近な者にあてた短篇の書簡が、ほとんどである。周知のように羲之は生前から、書の達人という名声を有していた。そのため当時の人びとは、羲之のちよつとした短簡でもたいせつに保存し、書のお手本として珍重してきた。その結果、通常ならず散逸するはずの短簡が、現在までたくさんつたえられてきたのだった。

ただこの「雜帖」という呼びかたは、書法からの命名であり、行文を考察する場合はいささか具合がわるい。そこで以下ではこの語でなく、私的な短簡を意味する「尺牘」の語をつかうことにしよう。ちなみに、ここでいう尺牘には、正統的な書簡文はふくまない。『晋書』王羲之伝には、「報殷浩書」「遺殷浩書」「与会稽王牋」などの、「書」「牋」と題された書簡文が採録されている。これらは、尺牘とはちがって正格の文語でつづられており、宛名以外の人物にもよまれることを想定した、なかば公的なものだ。それゆえ嚴可均も、それらは雜帖のなかにいれていないが、本稿もその用法にしたがうことにする。それゆえ、本稿でいう尺牘（『全晋文』中の雜帖）の語を定義すれば、公開を意図せぬ、ごく私的な内容をつづった書簡をさし、概して短篇のものをいう（ただし例外もあり）——ということになるだろうか。

まずこの羲之尺牘の構成や叙しかた、つまり書式を概観しておこう。羲之尺牘のおおくは短篇だが、それでもたくさん残存しているので、それらをみわたしてゆけば、おおよその書式は見当をつけることができる。じつさい羲之尺牘を通覧し、その書式を詳細に解明した研究もすでに公表されている。だが私見によれば、それらはおまりに精細すぎて、尺牘を読解してゆくにあたっては、やや不便な感じがしないでもない。ここでは書式の解明それじたいが目的なのでなく、尺牘読解の便宜をえるために、構成のありようを大づかみしたのである。そこで本稿では、従前の研究を簡略かつ平易にかみくだいて、ごくおおざっぱに書式を説明してみよう。

すると羲之尺牘は、ほぼ三段から構成されているといつてよさそうだ。それは、

時候のあいさつ

相手の安否

自分の近況

の三段である。以下、この三段構成が明確な「冬中感懐帖」（『淳化閣帖』八二）をとりあげ、その書式を確認してゆこう。この尺牘を、右の三段構成にあてはめれば、つぎのようになる。

十一月四日、羲之白。冬中感懐深、始欲寒。

足下常疾何如。不得近問、邑邑。

吾故苦心痛、不得食。経日甚為虚頓。力及不具。王羲之白。

「時候のあいさつ」十一月四日、羲之がもつしあげます。冬になると感傷的な気分になりやすいですが、ようやく寒さがきびしくなってきました。

「相手の安否」あなたの持病のほうは、いかがですか。最近お便りがありませんので、心配です。

「自分の近況」私のほうは、あいかわらず胸の痛みがあつて、ものがたべられません。それが何日かつづいて、すぐくよわつております。手紙ではじゅうぶん意がつくせません。王羲之敬白。

まずの「時候のあいさつ」を説明しよう。はじめに「十一月四日」とあるが、羲之尺牘ではこのように、冒頭に日づけがおかれたものがおおい。つぎの「羲之」は自分の名、そして「白」は「もつしあげます」の意だが、実質的には「羲之白」で拜啓ぐらいの意。この「白」字は、ほかに「死罪、頓首、敬問、報、告」(あとにゆくほど親愛の気分がつよくなる)などをつかい、「羲之死罪」「羲之頓首」「羲之報」などすることもある。つづく「冬になると」以下が、時候のあいさつである。「冬ノ夏がきました」「さむく／あつくなりました」のように、季節の変化を叙したただけの場合もあるが、この尺牘のように「冬になると感傷的な気分になりやすい」云々と、時候への感慨もあわせのべることもある。そちらのほうが、より親密な感じになる。

つづいての「相手の安否」にうつる。ここでは「あなたの持病のほうは、いかがですか」とのべて、相手のよすをたずねている。もしこれが返書であったなら、「あなたの手紙をよんで、安心しました／心配になりました」などの前置きふうことばを叙してから、「その後は、いかがお過ごしですか」云々と、相手の安否をたずねることになる。いずれにしても、この部分では相手に関するさまざまな話題が、主要な内容になるのである。

そして最後に「自分の近況」をかたる。ここで自分の近況をかたりながら、ほんらいの用件をのべるわけだ。ここでは、あいかわらず胸の痛みがつづいて、よわつておりますというだけだが、場合によっては、薬をおくつてほしいとか、だれそれに連絡してほしいとか、さまざまな具体的用件をのべることになる。そのあとの「力及不具」(力め及ぶも具はらず)は、「努力して手紙をかいたが、意をつくせませんでした」の意で、尺牘の最後におく常套のことばである。このほか、「ご返事をまっています」「ご自愛ください」などの字句も、布置さ

れることがおおい。そして最後に、結びのことは「王羲之白」がくる。この結びのことは、冒頭とおなじ語をつかうのがルールのようだ（ただし、冒頭では「名白」だが、結びでは「姓名白」）。

もう一例、「大寒帖」（『右軍書記』<sup>241</sup>）をしめしておこう。この尺牘は返書のようなのだが、やはり「が時候のあいさつ、が相手の安否、が自分の近況——という三段からなっている。

十二月廿四日、羲之報。歳尽感歎。

得十二日書為慰。大寒、比可不。

吾故羸乏。力不一。王羲之報。

「時候のあいさつ」十二月二十四日、羲之がもうしあげます。今年もくれようとし、感にたえません。

「相手の安否」十二日付けのお手紙をいただきまして、安心いたしました。大寒となりましたが、ちがころはお元氣にお過ごしでしょうか。

「自分の近況」私のほうは、あいかわらず元氣がありません。不一。王羲之敬白。

以上が、羲之尺牘のだいたいの書式である。この尺牘の書式をすることは、羅針盤を手にいれることに、比擬することができるだろうか。羲之尺牘という海原（うきはら）を航海（読解）してゆくさいに、自分はいまどこにいて、どちらにむかっているのか、これによってすることができるからである。具体的にいえば、尺牘中で、話題が彼我いずれにも属すると解しうる場合、どちらに関するものなのか、見当をつけることができるのだ。たとえば尺牘中に、

小大佳也。

という句があったとする。この句、これだけでは「お宅のみなさんは、お元氣ですか」の意とも、「わが家は、みんな元氣にやっています」の意ともれ、どちらに解すべきか判断がつかない。しかしこの三段構成をやって

おれば、尺牘中のどのあたりに布置されているかによって、それが判定できるだろう。つまり尺牘の前半、「相手の安否」の位置にあれば、前者の意だろうと推測できるし、尺牘の後半、つまり「自分の近況」の位置にあれば、後者の意に解すべきだろうと判断できるのである。

ところで、この義之尺牘の三段構成で注目したいのは、六朝の書儀、なかでも月儀の書式とよく似ていることである。書儀とは書簡の模範文例集のことをいう。礼法を重視する六朝貴族のあいだでは、書簡の書きかたにも儀軌あるをもとめるようになり、書儀のごとき範式がつくられたのだ。これらの模範文、おおきくは書儀と称するが、一年十二か月にふさわしい風流韻事をもりこんだ文例集は月儀とよび、日常生活の雑事に関するさまざまな文は雑儀と称する。また相手や内容の別によって、朋友書儀や吉凶書儀などの呼称をつかうときもある。義之尺牘の三段構成は、そのなかの月儀、具体的には西晋の索靖さくせい「月儀帖」（現存する最古の書儀でもある）の書式によく似ているのだ。

では、じつさに索靖の月儀をみてみよう。月儀は通常、一年十二か月の文例が一セットなのだが、現存の索靖「月儀帖」では、四、五、六の三か月を欠いている。その索靖「月儀帖」から、「十月」の文例を紹介してみよう。ふるい法帖（索靖は書家としても著名だった）を整理した、『全晋文』巻八十四からひいてくれば、

十月具書君白。 応鍾導運、 嚴霜稍隆。

時変物移、 感候増懐。

馳心繫想、 言存所親。 山川路限、 不能翻飛。 登彼崇丘、 逍遙長望。 延佇莫及、 思積情疲。 不勝鬱陶眷然之感、 裁復白書。 不悉。 君白。

「時候のあいさつ」十月、手紙をつづつて、愚生がもうしあげます。 応鍾（十月）の時期となり、霜が

おりるようになりました。

「相手の安否」時節がかわり風物も変化してきましたが、あなたは時候に感じて感慨もふかくなっておられることでしょう。

「自分の近況」わが想いをめぐらせ、したしき貴君にことばをかけたのですが、山川に道をさえぎられ、空をとぶこともかたありません。ちかくの丘陵にのぼっては、逍遙しながら「あなたのお姿を」遠望してみますが、ずっとたまたみずみずでもみえるはずもなく、私の心はつかれるばかりです。悶々たる憂いにたえられず、お手紙をつづってみました。不悉。愚生敬白。

というものだ。やはり羲之尺牘とどうよう、三段による構成がよみとれよう。<sup>3)</sup>

索靖は、羲之がうまれた年に逝去した人物である(二三九〜三〇三)。さらに羲之にも「月儀」の断片がのこっており、ひよっとすると索靖「月儀帖」をしかったのかもしれない。<sup>4)</sup>とすれば、羲之のころは、すでにこの種の文例集がひろまっており、三段による構成も定着しかけていたのだろう。明確に自覚していたかどうかはわからぬが、羲之はそうした月儀の書式にのっとって、彼の尺牘をかいたとおぼしい。つまり羲之は、相手によって書式や文体を丁重にしたり簡略にしたりしながらも、基本的には、月儀の書式(三段構成)を脳裏にうかべながら、彼の書簡文や尺牘をつづっていたのだろう。

索靖の「月儀帖」は、当時としては、最高の規範性をそなえた文例集だったはずである。羲之の尺牘が、そうした月儀とおなじ構成を志向していたとすれば、尺牘は独自のジャンルだったのではなく、通常の書簡文の延長上にあっただかんがえねばならない。そうだとすると、『晋書』本伝に採録される羲之の「書」のごとき本格的な書簡文と、雑多な内容の短簡たる尺牘とは、表面上はことなっただよようにみえるが、書式上ではおなじ地平



にあつたものとかがえてよかるう。<sup>5)</sup>

ただ具合のわるいことに、羲之尺牘では、右のような三段構成が明瞭にのみとれるものは、それほどおおくない。というのも、現存する尺牘は概して短簡であり、冒頭の口づけから末尾の「白」まで、ぜんぶのこつている「とみなしうる」ものは、あまりおおくないからだ。そのため、「時候のあいさつ」がなかったり、「相手の安否」がなかったりする尺牘が、すくなくないのである。

そうした、三段を具備せぬ尺牘がおおい理由については、羲之が筆をとつたさい、あるいは後代に伝承していったさいの、さまざまな事情が推測されよう。たとえば、忽卒の間にかいた、「相手が」ずっと格下だった、相手の安否はわかつていた、自分の近況は前便で報告していた——などの事情で、羲之が「や、や、あるいは」の字句を略したこともあつたらう。<sup>6)</sup> さらに、伝承してゆくあいだに一部がちぎれたり、第三者が故意に判断したりした可能性もないではないだろう。

ただ、おおきな理由としては、やはり書簡や尺牘、ジャンルの柔軟さがあげられねばならない。そもそも、「生涯をとおして、どんなひとにも、どんなケースでも、つねにおなじ書式で手紙をかく」などということ、我われ自身をふりかえつても、かんがえにくいことだといつてよい。十代のときと五十代のときと、朝廷の要人にかく場合と自分の子や孫につづる場合と、さらに忽々にかくときと念いりにつづるとき——、さまざまなケースによって、書式の厳格さや文体の軽重は自在にかわつてくるものだ。書簡や尺牘というものは、そうした柔軟さを許容する、ゆるやかなジャンルだったのである。それゆえ右の三段構成は、現存の羲之尺牘から判断するかぎり、右のような構成が比較のおおいぐらいに、ゆるやかに理解しておけばよかるう。

## 二、尺牘解釈の困難

つづくこの章では、義之尺牘の難解さについて解説しよう。義之の尺牘が口語ふうな行文をまじえていることは、もはや周知のことだろう。現在ではその文章は、口語ふうの句法や語彙をふくんだ、言語史研究の宝庫として珍重されている。ただ、義之尺牘の文章は口語ふうとはいっても、同時期の『世説新語』や『捜神記』などの行文とも、またことなつたものだ。尺牘独自の句法や語彙がおおく、書簡ふう口語と称すべき特殊な文章なのである。くわえて、かかれたときの状況や伝来のしかたが異例だつたこともあつて、義之尺牘は通常の文語とは、さうとう距離のある文章となつている。そのためその文は古来、意味を解しにくいものとされ、おおくの義之ファンや研究者をなやませてきたのである。

さうした義之尺牘を正確に読解するには、草書の字を判読する眼力と、口語まじりの文を読解する知力との、両方面の能力を必要とする。前者がないと、尺牘の真偽や釈文の是非を判定できないし、後者がないと、尺牘の行文を正確に解釈できないからである。ところが最近、その両方を兼備した研究者が出現した。張俊之氏がそのひとであり、氏の『二王雑帖詞彙研究』（中国社会科学出版社 二〇一五）がその成果である。張氏は、『淳化閣帖』等の書跡にあたって釈文を再検討し、また六朝口語の言語的特徴を把握したうえで、二王（王羲之と王献之）尺牘中の語彙の真義を追究されたのだつた。こつした義之尺牘への全面的な研究は、過去になかつたものである。とくに第四章「二王雑帖詞語釈義弁正」の指摘は、従前の読解に変更をせまるものであり、目からウロコがおちる思いをしたものだつた。

こうした最近の動向をふまえ、以下では、羲之尺牘の難解さと「従前における」それへの対応のあゆみを、ざっとみわたしてみることしよう。そのさいは、羲之尺牘の語彙研究に先鞭をつけた、近人の錢鍾書氏の発言をはじめに引用しておく。ついで、さきほどの張俊之『王羲之尺牘詞彙研究』（以下、張書と略称）の成果に依拠しつつ、羲之尺牘研究の最前線を紹介してゆきたいとおもつ。

第一に、文字判定のむつかしさを指摘せねばならない。「王羲之の雜帖は十のうち九が草書であり、字のスタイルのなかでも、とくに簡略かつ忽々にかかれたものだ」（錢鍾書『管錐編』第三冊「二〇五 全晋文卷二二」）。つまり草書によるくずし字の判定が、むつかしいのである。現在、羲之の尺牘はほとんど判読され、いちおうの釈文がなされているが、それでも難解な箇所については、甲の字なのか乙の字なのか、現在でも異論がすくなくない。そしてとうぜんのことだが、そうした箇所は読解が困難なのである。そうした難解さの例を一、二あげてみると、たとえば、

「九月三日帖」九月三日羲之報。敬倫遮諸人去晦祥禪、情以酸割。念卿傷切諸人。豈可堪処、奈何奈何。及書不既、羲之報。（『右軍書記』173）

九月三日 拜啓 敬倫や遮らは、昨月の晦日に「亡き王導の」祥禪の祭りをおこなったが、心をといてるようだったよ。おまえも彼らのことが心配だろうね。ほんとうにたえがたく、どうすればよいのか。手紙をかいたが「不既」だよ。羲之より。

「十一月十三日帖」十一月十三日告期等。得所高余姚并吳興二十八日二疏。知並平安、慰。（『右軍書記』65）

十一月十三日、期たちへ。おまえたちが「所高」してくれた、余姚「の者」と吳興「の者」からの二十八

日づけの二書簡をうけとった。二人とも元氣そうなので、安心したよ。

などがそれだ。前帖は「不既」、後帖は「所高」がわかりにくく、じゅうらい適切な訳文にするのが困難だった。ところが右の張書三十二頁では、もとの書跡(草書にくずした字)や羲之の文章スタイルをあれこれ検討したうえで、「不既」は「不具」だったはず、「所高」は「所写」だったはずで、ともに字を釈しそこなったのだろうと判定したのである。その結果、前帖は「不既　不具　心情をつくせない」、後帖は「所高　所写　筆写した」となって、スムーズに解釈できるようになった。じつに明快な判定だといべきだろう。現存の羲之尺牘には、この種の釈文のあやまりが多々あるとおもわれ、それが我われの読解を困難にしているのだ。

第二に、特殊な口語ふう、あるいは書簡ふう語彙を多用することである。「当時よみやすい文だったとしても、後世もよみやすいとはかぎらない。当時の口語をつかい流行のものに言及した行文は、時うつり事さつて事物が変化してしまうと、かつては平易だった字句でも、後人はその難解さにくるしむようになるものだ」(錢鍾書同書)。かつてはだれでもしっていた語でも、時代がくだると意味がとりにくくなるといふことである。とくに口語系統のことは、はやりすたりがはげしく、後代では難解になりやすい。くわえて羲之尺牘の場合は、『世説新語』や『捜神記』ともことなる独特の書簡ふう口語なので、六朝古小説をよみなれておれば、さつと理解できるといふものでもないのである。

そうした独特のことばとして、よく指摘されるのが書簡用語である。比較的しられたものとして、結びの語を例にあげてみよう。すると、現在の「敬具」や「恕々」に相当することばとして、力不具、力及不、不復一一、不次、不一一、などがあり、なかなかバラエティにとんでいる。力むるも具はらず、力め及ぶも一ならず、などと訓読するのだろうが、よみなれぬ者には難解にうつることだろう。

つぎに書簡中の語彙で難解なものを一、二あげてみよう。一例目は「遅散」という語。すなわち「復雨可厭帖」(『右軍書記』400)中に、

想足下明必顧之。遅散。

あなたには明日、きつとお越しいただけるとおもっています。「遅散」です。

という一節がある。この「遅散」の語は、通常の辞書類にはみえぬもので、おそらく当時の流行語なのだろう。過去の研究では、魯迅の「魏晉の気風および文章と薬および酒の関係」の指摘により、この「散」は五石散(不老長生の薬と信じられていた)をさし、「五石散」を服するの「をまちのぞむ」の意に解したりしていたようだ。しかし張書五十四頁の指摘によれば、この「散」は「うさばらしする」の意であり、それが尺牘独特の用法により、「見」(お会いする)の意に転じているのだという。つまり、「散」うさばらしする　お会いしてうさをはらす　お会いする」と変化したわけだ。すると「遅散」(散ずるを遅<sup>遅</sup>つ)は、「お会いするのをまちのぞむ」の意になり、文脈にぴたりと一致する解釈となった。こうした語、たしかに「かつては平易だった字句でも、後人はその難解さにくるしむようになる」一例だといってよからう。

二例目は「損尚」。やはり羲之の「書勿勿未得遣信帖」(『右軍書記』421)に、

吾既不快、弱小疾苦、甚無頼。損尚小停、有定去日、更与足下相聞。

私の体調がわるいうえ、子どもたちも病気で、すごく心ほそい思いをしております。貴殿にはすこし逗留することを「損尚」していますが、わが家へお越しいただける日がきまりしだい、貴殿にお知らせします。

という一節がある。この「損尚」の語も難解だ。ところが張書七十五頁にみると、この「損」は恵施、恩賜の意で、書簡中で「对方が恵施してくれたのを感謝する敬辞」として使用するという。つまり「損」は、「あ

あなたが してください」( = 動詞) や、「あなたが恵与してくれた」( = 名詞) の意だということになる。したがって、この「損尚小停」は「小停するを損し尚そんつ」と訓読し、「貴殿は「そちらで」すこし逗留してくださっておりますが」という意味になる。

おなじようなケースとして、「嘗新帖」(「三王帖」中40)のなかの、

損、恵、野鴨一双。秋来未得、始是嘗新。

貴殿は野鴨一つがいを「損恵」してくれました。秋になってから、まだ入手できませんでしたが、これでも私をはじめて賞味できそうです。

という用例がある。この「損恵」は「あなたがお恵みくださった」の意である。この例のほうは、「對方が恵施してくれたの感謝する」ニュアンスがわかりやすいだろう。いっぽう、「あなたが恵与してくれた」( = 名詞) の用例としては、「損書」「損詩」「損米」などの語が、やはり六朝書簡中につかわれていると「張書は」指摘している。

張俊之氏によれば、この「損」字、もとは減損や虧少の意だったが、中古になってから、右のような用法が生じてきたのだという。この「損尚」や「損恵」を例にとれば、恵みをあたえる側は損をするのだが、恵みをうける側からみれば、相手が恵施し、恩賜してくれることになるので、こうした意味が生じたようだ。つまり、「あなたが損をする」 私が恵みをいただく」ということなのだろう。こうした用法は、書きと読みでの双方の文章心理を反映させたもので、「通常の文でなく」書簡中にだけ出現することとあわせ、なかなか興味ぶかい現象だといえよう。

以上、特殊で、したがって難解な語彙を、二例ほどあげてみた。義之尺牘には、この種の語彙が頻見している

のである。ただし、これらの語は難解ではあるが、べつに高度な思想を開陳しているわけではない。現在ふうにいえば、若者がつかうメールのことが、後世の人びとに理解しにくい、という程度の難解さであって、内容が深遠だからむづかしい、というわけではない。くわえて、最近では「張書のほかにも」六朝の口語文献を調査した研究がでてきており、要は、ひろく用例をあつめてゆけば、やがては解決しうる種類の難解さだといえよう。真にむづかしいのは、第三の、省略がおおいということだろう。この難解さについては、錢鍾書氏がつぎのように説明してくれている。「六朝の法帖は、理解がたいへんむづかしい。それらのおおくは、今日の書きつけやメモのような「ごく簡略な」もので、当時うけた者なら、さっと了解できただろうが、後世の者がよむと、いくらかんがえても意味がとれない」。「親戚や友人がおしゃべりしたり、同僚どうしでワイワイしゃべったりしていると、おのずから固有の言語空間ができてくるものだ。桃花源にのみ、仲間ことばが存するわけではない。全員がおなじ言語空間にいたなら、いわなくても了解してもらえし、一言いえばすべてわかってくれるのである」(以上、ともに錢氏回書)。

羲之尺牘は、ほとんどが周辺の人びとへあてたものだ。彼らとはふだんから親近しているので、「いわなくても了解してもらえし、一言いえばすべてわかってくれる」という状況があった。そうした関係のなかで尺牘を交換するとき、双方了解ずみの事がらなどは、どしどし省略してもかまわない。つまり羲之尺牘はおおく、状況に依拠した文章なのである。

わかりやすい例をしめせば、正式な書簡だったら、

鈴木一郎さま。あなたは来月の 月 日に 会館で開催される 先生謝恩会に、出席されますか。

とかくべきところ、羲之尺牘ではしばしば、

来月いく？

ですましてしまうのである。それだけで、じゅうぶん通じるからだ。だが、羲之と親近しておらぬ「たとえば後世の」者が、「来月いく？」の書簡を目にした場合、前後の事情を推測する字句がなにもないので、内容理解にくるしんでしまっわけだ。

羲之尺牘から、そうした極端にみじかい例をあげてみよう。それは「卿大小佳帖」（『右軍書記』392）であり、

卿大小佳。

あなたのお家のみなさんは、お元気ですか。

というものだ。この尺牘、書きくだせば「卿の大小は佳なりや」という一句四字のみ、これですべてである。現在ふうにいえば、「みんな元気？」というだけの手紙だ。すごい省略ぶりである。尺牘というより、メモといふべきかもしれない。この尺牘、ひよっとすると、前後に字句があつたのだが、それが伝承の間にうしなわれてしまった、という可能性もないではない<sup>17</sup>。しかし羲之の尺牘の場合、こうした一句だけというケースも、じゅうぶんありえるだろう。双方が前後の事情を知悉しておれば、この一句四字だけでも、相手に通じるからである。

だが現代の我われにとつては、こうした省略おおき尺牘は、じつに理解が困難だ。前後がないので、該尺牘がだれにあてたものか、いつ、どこで、どういう事情でかいたのか、さっぱりわからない。相手の家族がもともと病気もちだったので、それで深刻に心配しているのか。それとも、深刻さなどはなく、かるい気分で「みんな元気？」といっているのか。まったくわからないのだ。さらに、もしこの一句四字に、釈文の誤りがあつたり、難解な語彙がつかわれていたりしたら、「みんな元気？」の意味さえ理解できなかつただろう。こうした、前後がなく状況が不明な尺牘を解釈するのは、一枚の証明写真をみて、その人の気質や経歴を推測することに比擬でき



よう。それは、シャーロック・ホームズのごときひとでも、困難なことではあるまいか。

以上、義之尺牘の難解さについて、おもに張俊之『王雑帖詞彙研究』の研究に依拠しながら、三つの方面から解説をほどこしてきた。第一に文字判定のむづかしさ、第二に特殊な語彙の使用、第三に省略のおおさ、であった。この種の難解さ、義之の尺牘を研究してきたかたは、とうにご存じだろうが、通常の六朝詩文をよんできた研究者は、まだあまり気づいておらぬかもしれない。私見によれば、第一の文字判定のむづかしさや、第二の特殊な語彙については、ひろく用例をあつめ、衆知を結集してゆけば、将来的にはなんとか克服しうることだろう。ところが、第三の省略のおおさについては、新資料でもみづからぬかぎり、将来的にも解決できないだろう。その意味で、義之尺牘の読解の困難さは、この点にこそ存しているといつてよい。

### 三六 公私と雅俗の比例

義之尺牘の文章は口語をまじているが、その交えかたは一樣ではない。甲の帖では口語ふうな「了無」「不」の否定形をまじえるが、乙の帖は通常の「無」「不」の否定ばかり——というふうに。このように、尺牘中の語法はいっけん不統一のように見える。いったい使いわけルールが存しているのだろうか。

そつした目で義之尺牘をよんでゆくと、けつしてランダムというわけではなく、それなりの決まりがあったようだ。それはなにかといえば、内容上の公私レベルと、文章上の雅俗（文語と口語）レベルとを比例させる、という決まりである。つまりおなじ尺牘の文でも、貴顕にあてた公的なものと、典雅かつ丁寧な行文でつづっているのだが（少数である）、旧知にむけた私的なものと、口語的かつ簡略なスタイルでかいている（多数であ

る)のである。このルールは、おそらく義之尺牘だけでなく、「他の文人の作でも」普遍的に通用するものともわれるが、そうした相関関係がはつきりわかるのが、この義之尺牘だといってよからう。

たとえば、貴顕にあてた尺牘をあげてみよう。それは貴顕は貴顕でも、なんと、ときの天子にあてた尺牘である。そもそも尺牘という呼称じたい、身近なひとへの短簡というニュアンスを有している<sup>(8)</sup>。それゆえ、天子へ尺牘をだすなどということは、ほんらいありえないのだが、『右軍書記』には、なぜか天子（東晋の穆帝）にあてた尺牘二篇がおさめられている。ひとつは「臣義之言帖」<sup>166</sup>とよばれる、

臣義之言。伏惟陛下、天縱聖哲、

「徳斉二儀。

臣義之がもつしあげます。ふしておもいますに、陛下におかれましては、天より聖哲さをたまわり、その徳望は天地にもひとしいほどでございます。

がそれであり、もうひとつは「応期承運帖」<sup>167</sup>とよばれる、

「応期承運帖」<sup>167</sup> 応期承運、踐登大祚、普天率土、莫不同慶。臣抱疾遐外、不獲隨例。瞻望宸極、屏營一隅。臣義之言。

時期に應じて天命をお受けし、天子の位につかれました。天下あまねく、よろこばぬものはおりません。

それなのに臣は遠地で病にかかり、即位の儀式に参列できません。はるかに皇城をのぞんでは、遠地で恐縮いたしております。義之がもつしあげました。

がそれである。

この二帖、『右軍書記』ではつつつけて採録する。内容からみて、もと一帖だったのが、なにかの事情で二帖に

わけられてしまった、とかんがえるべきだろう。この尺牘は、どうやら羲之が病臥中だったため、穆帝（このときわずか二歳）が踐祚する式典に出席できぬことをわびたものらしい。内容からみて、ほんらい上奏文だったとおもわれるのだが、なぜか『右軍書記』に編入されて以来、尺牘の仲間とみなされてきた。

ところでこの尺牘の文、天子にあてたものだけに、きちんとした四字句でつづられているのに注意しよう。「臣抱疾遐外」のみ五字句だが、「臣／抱疾遐外」とかんがえれば、これも四字句といえなくもない。さらに「天縱聖哲」徳斉二儀」ではめずらしく対偶にととのえ、また「天縱聖哲」句には、『論語』子罕の「固天縱之將聖、又多能也」の典故をつかい、「普天率土、莫不同慶」二句には、『詩』小雅北山の「溥天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣」の典故をもちいている。くわえて、「応期」「承運」「踐登」「大祚」「宸極」などの、天子限定の用語も多用していて、全体的に尺牘らしくらぬ典雅な行文になっている。通常の尺牘ではありえぬ、例外的なほどの丁寧さだといってよからう。

もう一篇、『復蒙殊遇帖』（『右軍書記』297）という尺牘もよんでみよう。これは、だれへのものか未詳だが、内容からみて、やはり高位のひとへの手紙だと推測される。それは、

羲之死罪、復蒙殊遇。求之本心、公私愧歎、無言以喻。去月十一日發都、違遠朝廷、親旧乖離。情懸兼至、良不可言。且軫遠、非徒無諮親之由、音問軫復難通、情慨深矣。故旨遣承問、還願具告。羲之死罪。

おそれながらもうしあげます。私はまた「会稽の知事という」厚遇をいただきました。心中おもいますに、公私とも慙愧にたえず、いうべきこともありません。先月十一日、都を出発し、朝廷からおざかり、親戚や旧友とも離別してしまいました。いろんな思いがこみあげて、とても口ではいえぬほどです。都からはなれるにつれ、あなたとお会いする機会がなくなり、また音信も困難になって、悲嘆にくれておりま

す。それで使いの者をやって、お便りをたまわろうとするしだいです。どうかお返事をくださいますように。義之敬具。

というものだ。この尺牘は、義之が会稽内史として赴任する途上の作だとおもわれる。「死罪」の語をつかうらには、朝廷の高官の者にあてたものなだろう。この文章でも口語的な句法はみえず、きちんとした文語でつづられている（四字句もおおい）。その意味で、この尺牘は「復蒙殊遇帖」などという名称でなく、「謝蒙殊遇書」（殊遇を蒙るを謝する書）と命名してもよさそうな書簡である。

貴顕にあてた尺牘をみてきたが、こんどは旧知にむけた、私的な内容の尺牘をみてみよう。この場合は、口語がまじりやすくなる。たとえば、「与安石俱佳帖」（『右軍書記』180）がそれである。

吾遂沈滞兼下。如近数日、分無復理。昨来増服陟厘丸、得下、不知遂断不。了無所咋噉、而藥得停。不知当復、見弟、理不。独下便長歎。小蘇息、更知問。

私は体調がすぐれず、下痢もおこしている。ここ数日は、おさまりそうにないほどひどかった。昨日から陟厘丸をおおめに服用しているが、やはり下痢がつづき、いつおさまるものやら。おかげで、まったく食事がとれぬが、でも薬をとめることもできない。だから、おまえとあえるかどうかもわからない。私だけ下痢がつづくので、まったくがつかりだよ。すこし調子がよくなれば、また便りをするつもりだ。

この尺牘は、相手を「弟」とよんでいるので、年少の近親にあてたものだとおもわれる。だからだろう、内容も、体調をくずして下痢がみだという、率直かつあけっぴろげなものである。そうした内容にに応じて、文章も「不知遂断不」（いつおさまるものやら）や「了無所咋噉」（まったく食事がとれない）、さらに「不知当復、見弟理不」（おまえとあえるかどうかもわからない）などという口語的な口調をもちいている。また文中で「下」（下痢、

あるいは下痢をする)や「不知」の字をくりかえしており、おかげで行文全体にくどい感じがただよっている。これも口語ふうの冗舌表現だといってよからう。

そのほか、口語的口調がめだつ尺牘をあげてみよう。すると、

「中郎女帖」中郎女、頗有所向不。今時婚対、自不可復得。僕往意、君頗論不。大都此亦当在君。(『淳化閣帖』八十一、「王帖」上41)。

「末っ子の王献之にむけて」中郎の家の娘さんは、ちょっとは気にいったかね。このたびの縁談は、二度とないほどいいものだよ。私がいまにいったこと、すこしは考慮してくれたかね。でもこの件は、やはりおまえの気もちしだいなんだよ。

「霜寒帖」十一月七日羲之報。近因子卿書、想行至。霜寒、弟可不。頃日了、不得食、至為虚劣。力及数字。羲之報。(『右軍書記』225)

十一月七日 拜啓 ちかごろ、子卿からの手紙によると、おまえはまもなく出発することのこと。霜寒のころになったが、元気にしているかな。私のほうは、ちかごろはまったく食事がとれず、よわっているよ。なんとかがんばってこの手紙をかいてみた。羲之より。

などがあげられる。この両帖、ともに文章は対偶や四字句にととのえようとせず、内容もぞんざい、あるいははらのおけない感じのものである。はじめの「中郎女帖」は、息子の王献之にむけて、縁談をすすめた手紙である。したがって、文中の「中郎」は郗曇、「中郎女」はその娘の道茂をさすことになる。自分の息子への手紙だからだろう、傍点を附したところなど、はつきり口語ふうな行文にしている。あとの「霜寒帖」は難解な文章で、意味もよくわからないのだが(子卿もだれか未詳)、いちおう右のように訳しておいた。ここでも二人称に「弟」

という語をつかい、また「可不」や「了不」という明瞭な口語をつかっているので、そうとう親近した相手だったろうと推測できる。

これらによって、内容上の公私と文章上の雅俗とは、基本的に比例の関係にあることが推測できた。こうしたルールをしておれば、相手の推定や読解に役立たせることもできるだろう。もともと、それは「基本的に」というにすぎず、このルールに合致しないケースもすくなくない。具体的にいえば、貴顕への尺牘であっても、羲之が心理的に「ちかい」と感じておれば、口語をまじえることもあるし、したい旧知への尺牘であっても、内容がシリアスなものだったら、典雅な行文にちかづいてゆくのである。

たとえば前者の例として、つぎのようなものがある。すなわち「不審聖体帖」(『右軍書記』165)に、  
臣羲之言、寒蔽、不審聖体御膳何如、謹付、承動靜。臣羲之言。

臣羲之もうしあげます。寒さきびしきおりですが、皇后さまにおかれましては、お食事はよくとれておりますかな。謹んで書状をおくり、こようすをうかがうしだいです。臣羲之もうしあげます。

という文章がある。この尺牘をおさめる『右軍書記』の注に「右は皇太后に表す」とあるので、これは皇太后にあてたものだろう。とすれば、かしまった文語でつづるべきだったろうが、羲之はここで「不審聖体御膳何如」(皇后さまにおかれましては、お食事はよくとれておりますかな)という、やや口語めいた句法をつかっている。「聖体」「御膳」という尊敬語と、「不審……何如」という「俗」なる行文とが、一句中に同居しているのだ。私見によれば、こうした奇妙な雅俗混淆は、「王と馬と天下を共にす」という「羲之が属する」王一族の高貴な身分が、関係しているのではないかとおもつ。そのため、羲之はこのとき皇太后に対し、心理的になにかしら親近した気分を感じていたのではないか。彼のそうした気分が、この雅俗混淆の行文をつづらせたのだろう。

いつぼう逆に、旧知の者であっても、そのひとが不幸な状態、とくに逝去したとなると、話はべつだ。尺牘の内容はとうぜん深刻なものとなり、その行文もぐつと丁重かつ悲愴な感じをおびてくる。つまり、したいし知人との尺牘交換であっても、なにかの事情で心理的に憐憫や悲嘆の情を感じる状況であれば、文章は「雅」になつてくるのである。じつさい、義之尺牘には身近なひとの死をいたんだものがおおいが、それらはおおむね丁重な行文でつづられている。そうした例を一、二あげてみよう。

「奄至帖」庾新婦入門未幾、豈図奄至此禍。情願不遂、緬然永絶。痛之深至、情不能已。況汝豈可勝任、奈何無何。無由叙哀、悲酸。(『右軍書記』115、『淳化閣帖』六6)

庾さんは息子の家に輿入れしてまもないのに、こんな不幸にあわれるとは、思いもありませんでした。本復の願いもむなしく、永別されました。私の悲しみはふかまるいつぼうで、やむことがありません。ましてあなたは、たえがたいことでしょう。どうしたものか。お悔やみのいいようもありません。いただきます。いかがいです。

「延期官奴小女帖」延期官奴小女、並得暴疾、遂至不救。愍痛貫心奈何。吾以西夕、至情所寄、惟在此等、以荣慰余年。何意旬日之中、二孫天命。日夕左右、事在心目。痛之纏心、無復一至於此。可復如何。臨紙咽塞。(『右軍書記』176)

延期と官奴のふたりの幼女が、ともに急病にかかり、たすけることができませんでした。悲しみが心をつらぬき、どうにもなりません。老いがせまった昨今、この幼女たちだけが私の楽しみで、晩年をなくさめてくれるとおもっておりました。それなのに旬日のうちに、ふたりとも死んでしまうとは。いつでも、そしてどこにいても、死んだふたりがおもいだされます。悲しみが心にまとわりつき、それ以外のことはか

んがえられません。どうすればよいのでしょうか。この尺牘をまえにして、むせびなくばかりです。

はじめの「奄至帖」は、「庾新婦」の死を哀悼したものの。「入門」（嫁入りする、の意）の語があるので、この庾なる女性は、羲之の息子のだれかに嫁してきたのだろう。その女性が、輿入れしてまもなく死んでしまったので、羲之はこの尺牘をつづつたのである。あとの「延期官奴小女帖」のほうは、一族のふたりの幼女の死をいんだものだ。「天命」とあり「旬日之中」（旬日のうち、の意）とあるので、おそらくふたりの幼女はあいついで死んでしまったのだろう。

この二篇の尺牘、悲痛な内容に感じて、文章も「雅」になっていることに注意しよう。前帖は初句と末句以外、後帖は初句と「以宋慰余年」句以外、すべて四六句になっている。すると前帖の「況汝豈可勝任」句も、「況んや汝をや。豈に勝任ふべけんや」と訓じるのでなく、「況んや汝は豈に勝任ふべけんや」と六字句ふうを理解すべきなのだろう。あえて「況」「豈」や「勝」「任」を兼用したり、なくてもよい「可」をつかったりして、六字句にとのえている。このように身近な者にあてたものであっても、話題がシリアスなものだったら、羲之は文語のスタイルを採用しているのだ。文語はやはり格調たかく、こうしたときにふさわしいのだろう。

そうした点からいえば、貴顕の死に対する哀悼は、羲之尺牘のなかでも、とくに丁寧な行文になりやすい。「此公立徳由来帖」（『右軍書記』<sup>399</sup>）はまさにそれに該当するものであり、

此公立徳由来、而嬰斯疾。每以惋慨。常冀積善之慶、当獲潜佑。契同昔人、尋憶事。緬然永絶。哀惋深至。未能喻心。省足下書、固不可言已矣。可復奈何。絶筆流涕。

この公はながく徳望をみがいてこられたのに、病気になってしまわれた。私はその病気をいつもなげき、公は積善の余慶にめぐまれ、天佑をうけられるはず、昔人とおなじように……だろう、とねがっていたの



です。ところが公は永遠に旅だってしまったわけです。私は悲しみにくれて、いすべきことばがありません。貴殿のご書簡をよんでも、もつなにもいえませぬ。どうすればよいのでしょうか。筆をおいて涙にくれるばかりです。

という文章である。

この尺牘は、だれにあてたのかはわからぬが、話題のぬし（死去した人物）を「此公」と呼称しているので、そうとう高位のひとが死んだのだろう。そのためか、羲之は四六句を多用したうえ、めずらしく典拠ある語までつかっている。「立德」は『左氏伝』襄公二十四年の「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽」、「斯疾」は『論語』雍也の「伯牛有疾、子問之。自牖執其手曰、亡之、命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也」、そして「積善之慶」は『易』坤卦の「積善之家、必有余慶」を、それぞれ利用している。

この貴顕の死を哀悼した尺牘、丁重といえはたしかに丁重な表現だろう。ただ私見によれば、丁重すぎて、やや仰々しい気味がしないでもないようだ。行文を四六に整齊し、経書からの典故もちいているが、逆に、形式がととのいすぎたせいか、哀悼の情をそつなくつづつたものにすぎぬ、という印象が感じられる。さきの「奄至帖」では「ましてあなたは、たえがたいことでしょう」と相手を気づかい、「延期官奴小女帖」でも「いつでも、そしてどこにいても、死んだふたりがおもいだされます。悲しみが心にまとわりつき、それ以外のことはかんがえられませぬ」と、おのが苦衷を率直かつ直截にかたっていた。これにくらべると、「此公立徳由来帖」のほうは典故をつかつたぶん、おおげさで型にはまった哀悼になってしまっているようだ。

後世、こうした丁重な哀悼書簡は継承され、洗練されていって、ひとつのパターンとなってゆく。そして六朝をすぎて唐代あたりになると、吉凶書儀というひとつのジャンルをなすほど盛行してくる。いま敦煌から出土し

た文物のなかに、こうした吉凶書儀の類がたくさんふくまれているが、それは、礼法をおもんじた知識人のあいだでは、冠婚葬祭の礼がとくにうるさく、それだけこの種の書儀が必要とされたからだろう。そうしたながいスパンでみまわしてみると、この「此公立徳由来帖」にみえること哀悼表現は、後世の洗練され、パターン化された書儀の源流になったのではないか、とおもわれてならない。おそらく、こうした義之尺牘の類が参照され洗練されて、吉凶書儀が形成されていったのだろう。

以上、義之尺牘における内容上の公私と文章上の雅俗との相関について、気がついたことをのべてきた。これを要するに、両者は基本的に比例の関係にある。ただし例外的なケースもしばしば出現し、機械的にわりきれるものではない——とまとめてよからう。このように手紙の文章というものは、身分の高下や話題の違いはもちろんだが、地縁や血縁の濃淡や心理的な親疎の度あいによっても、文体やことばづかいが微妙にかわってくるものなのである。

私見によれば、そうした微妙な変化は、義之尺牘だけでなく、書簡ジャンルの文章一般にありえることではないかとおもう。尺牘にせよ書簡にせよ、手紙文の雅俗や待遇表現は、差出人と受取人のあいだにおける、上下や親疎の関係を精確に反映しているはずであり、なかなか興味ぶかい研究テーマだといえよう。こうした書簡中の文章心理を精細に分析してゆく研究は、まだ本格的にはなされていないようだが、もっと留意されてしかるべきテーマだとおもう。研究の進めかたとしては、四六句の多寡や典拠の種類、そして口語的語法の有無や待遇表現などに着目してゆけばよい。くわえて、この種の研究は材料がおおいほうが都合がよいので、計量的手法を援用することもかんがえられる。その意味でも、たくさん残存している義之尺牘などは、絶好の研究資料だとおもわれるのである。

## 四、尺牘の価値

この章では、羲之尺牘が有する価値を考えてみよう。この羲之尺牘、ふるくから書のお手本として重視されてきたし、また最近では、六朝の口語資料としても珍重されてきている。さらにこの尺牘を精読してゆけば、羲之のかくれたエピソードをしり、おりおりの肉声をきくこともできよう。ただそれらは書道や言語史、さらに「羲之の」伝記研究の立場などからみた価値にすぎない。この膨大な羲之尺牘は、これら以外にも、さまざま価値を有しているはずだ。では、どんな価値を有しているのだろうか。

まず文学作品としてみたとき、羲之尺牘はいかなる価値を有しているのだろうか。羲之尺牘は広義の書簡に属するので、書簡文としての価値をかんがえねばならない。そのためには、書簡の理想的ありかたをしっておく必要がある。そこで『文心雕龍』の書記篇をひもといてみると、劉勰は書簡ジャンルについて、

詳総書体、本在尽言。所以散鬱陶、託風采。故宜条暢以任氣、優柔以憚懷。文明從容、亦心声之獻酬也。

書簡のジャンルを総合的にかんがえると、根本は胸の内をのべつくすことにある。鬱積した思いを発散し、おのが風格をきざみつけるのだ。だから、のびやかにおもつまま叙し、おだやかに心を満足させるようつづるべきだ。文意が明確でゆとりがあれば、心の声の応酬となるだろう。

とかがたっている。この劉勰の発言は、彼が同篇で提示する実例からみると、史上よく知られた書簡文、たとえば司馬遷「報任少卿書」や嵇康「与山巨源絶交書」のとききを想定しているようだ。とくに注目したいのは、書簡文は「根本は胸の内をのべつくすことにある。鬱積した思いを発散し、おのが風格をきざみつける」ものだ、

という発言である。たしかに右の書簡のなかで、司馬遷は宮刑に処せられた己の痛惜の想いをかたり、嵇康は出仕をのぞまず隠棲したいと切望していた。それらの作は、まちがいなく「鬱積した思いを発散し、おのが風格をきざみつけ」たものといつてよからう。

羲之の尺牘から、これに該当するものをさがしてみれば、たとえば北伐戦争への危惧や会稽内史としての職務を叙したものが、あげられてよからう。それらの尺牘では、東晋王朝の「政治家としての思いをよくのべており、それなりに興味ぶかいものがある。たとえば、後者（会稽内史としての職務）を叙した尺牘をみてみよう。羲之が内史に任じられた年だるうか、会稽に大規模な飢饉が発生した。そのため、会稽の地では食糧が不足し、民衆は困窮の極みにあつた。ところが中央政府の年貢のとりたては、あいかわらずきびしいまま。そうしたなか、羲之は友人に「此郡帖」（『淳化閣帖』八43、『三王帖』上3）という尺牘をおくつた。

此郡之弊、不謂頓至於此。諸逋滯、非復一條。独坐不知、何以為治。自非常才所濟。

会稽郡の疲弊が、急にこんなひどくなるとは、おもってもいませんでした。税の未納や滞納は、とても一件どころではありません。ひとり座して対処の方法をかんがえても、よい知恵がつかびません。私ことき凡才が対応できる事態ではないのです。

この尺牘をよむと、羲之が会稽の疲弊ぶりを真剣にうれえていることがわかる。「ひとり座して対処の方法をかんがえても、よい知恵がつかびません」という「尺牘中の」うったえは、誠実な地方官としての羲之の心情をよくあらわすものである。

もう一篇、「賑民帖」（『三王帖』中16）という尺牘もあげよう。それは、右の飢饉への対応策を「友人にむけて」論じた尺牘である。ここで羲之は、警沢品である酒の製造を禁止し、酒造用の糧米を民衆の食糧にまわすべ

きだ、と主張している。すなわち、

百姓之命倒懸、吾夙夜憂此。時既不能開倉庾賑之、因斷酒以救民命。有何不可。而刑猶至此、使人歎息。吾復何在、便可放之。其罰譴之制、宜嚴重、可如治日。

民衆の命たるや、逆さにつるさされているような状態です。私は日がな憂慮しています。以前、私は食糧倉庫をあけて賑恤<sup>しんじゆ</sup>することができなかったため、それで今回は「米を浪費する」酒造を禁じて、民衆の飢餓をすくおうとおもっています。これをやってならぬ理由が、どこにあります。こんな状況なのに、「困窮した民衆をとりしまる」刑罰はきびしくなっていて、じつになげかわしいことです。私はどのような、獄中の者を釈放してやればよいのでしょうか。刑罰の制度たるや、嚴重ではあるべきですが、太平のときとおなじでよいでしょうか。

というものである。これらの尺牘によって、義之の地方政治家としての奮闘ぶりがよくつかげえる。これらは「司馬遷のように」おのが痛惜の想いを叙したのではないし、また「嵇康のように」隠棲の願望をかたつたものでもない。しかしそれでも、劉勰のいう「鬱積した思いを発散し、おのが風格をきざみつける」にちかい内容だといってよからう。

だが残念ながら、こうした「劉勰が想定したような」内容は、義之尺牘ではほんの例外にしかすぎない。義之尺牘のほとんどは、内輪の仲間や近親にむけた日常の消息であり、身辺の些事（存問や病気見舞いの類）なのである。たとえば、

「晴快帖」未復知問。晴快、卿転勝、向平復也。猶耿耿。想上下無恙。力知問。不具。王羲之敬問。（「右

まだお手紙がとどきません。ですがよいお天気がつづきますので、あなたも気分がよくなり、本復にむかっていることでしょう。でも、まだ心配です。みんなが病気でなければいいんですが。手紙をまっています。忽々。王羲之敬白。

〔愛鵝帖〕数日雨冷。腎氣嗽腰、復嗽動靜。遇風緊、陂湖汎漲、船不可渡。勿訝。謝光祿鵝在山下、懸情可愛。羲之遣。〔二王帖〕中36)

この数日は雨がつづきます。私は腎気のため腰がいたみ、また咳もできるようにになりました。風がつよいので、陂湖は波がたかくて、船でわたれませんでした。でも、心配は不要です。謝光祿の鵝鳥が山のふもとにありますが、いつも気にかかり、いとおしく感じられます。羲之より。

〔羲之累書帖〕初月十二日、羲之累書、至也。得去月二十六日書為慰。比可不。僕下連連不斷、無所一欲。嗽輒不化消。諸弊甚、不知何以救之。罔極然。及不一。羲之白。〔右軍書記〕247)

正月十二日、私のほうから何度か手紙をだしましたが、とどいておりますか。去月二十六日付けのお手紙をいただいて安心いたしました。このごろはお元気ですか。私は下痢がおさまらず、食欲もぜんぜんありません。なにか口にしても消化もできないのです。それ以外もあちこち具合がわるく、どうすれば回復するのかわかりません。まったくひどいことです。忽々。羲之より。

のよつなものだ。こうしたものが、羲之尺牘の大多数をしめているのである。

こうしたたくいは、劉勰が想定していた書簡ではなかったろう。便りがないので心配ですとか、下痢でよわっていますなどの内容は、彼のいう「鬱積した思いを発散し」たものではなかったろうし、鷺鳥はかわいいとか、食欲がありませんなども、「おのが風格をきざみつけ」たものとはいえぬ、とおもったことだろう。劉勰のかん

がえる「鬱積した思い」とは、宮刑に書せられた司馬遷の無念のときものであり、「おのが風格」も、出仕を拒否し隠棲をねがう嵇康のような風格をさすのだろう。それゆえ、もし劉勰が羲之の尺牘を一読したら、「こんな身辺雑記の類など、文学とはいえぬ」と不機嫌そうにつぶやいたのではあるまいか。

このように、旧時の見かたでは、この種の内容は、文学として価値がたかいものではなかった。「近親の者の病気を心配したり、幼女の早世をなげいたりする情愛ふりに、心がなくさめられる」、「ささやかかもしれないが、こうした善意の表現こそ、すばらしい文学のあかしではないか」という見かたもあるかもしれない。だが旧時の中国では、この種の近親への情愛は、異性への愛情とどうよう、あまりたかく評価されるものではなかった。いやむしろ、児女の情としていやしめられるものだったのである。

くわえて羲之の尺牘には、右のような内容上の瑕瑾のほか、行文の面でもおおきな欠点がある。それは文章をかざつて、美的なものにしようという修辞意欲が、ほとんど感じられないということだ。身辺雑記の口語まじりの帖はもとより、会稽内史としての職務に関連した尺牘でも、その点では似たようなものである。対偶にととのえようとする意識は希薄だし、典故も「右でみた例外的な帖以外」あまりつかおうとしていない。六朝に盛行した美文とくらべれば、修辞のレベルは雲泥の差があるといわざるをえない。つまり、羲之の尺牘は文章技巧の方面でも、『文選』に採録されることなど、とつていかにがえられぬ低レベルの作なのである。そうした意味で、当時の文学観からすれば、羲之尺牘は価値ありとはみとめられなかった、と断じてよからう。

ただこうした判断は、「旧時の」伝統的文学観からみた場合だった。現代の、ことなつた視点からみなおしてみれば、またべつの価値をみいだすこともできよう。では現代の、そして文学以外の視点からみたとき、羲之尺牘は「書道や言語史での好資料というほかに」どのような価値を有しているのだろうか。

私見によれば、羲之尺牘は文化史的価値といふべきものを有していそうだ。この羲之尺牘には、「劉媿のいう」鬱積した思いの吐露やりっぱな風格にはとぼしいかわりに、飾りけのない率直な心情が吐露されている。たとえば、さきにみた幼女早世の悲嘆ぶりがそれだ。これは、貴顕の薨去しか叙しながらぬ中国では、潘岳の同種の哀辞作品とならんで、めずらしい事例だといふべきだろう。その意味で、幼少の死を哀悼した作として、「文学的価値はあやしいとしても」それなりに文化史的な意義は存するといつてよからう。

さらに尺牘中のさまざまな病苦のうったえも、注目すべきである。風邪、発熱、食欲不振、腹痛、腫れ等々。とくに「下痢でくるしんでいます」などの記述は、ことがことだけに、他の詩文ではあまりお目にかからぬものである。この種の記述は、「司馬遷の「痛惜の想いや」「嵇康の「隱棲の願望などくらべると、つまらぬ些事にすぎぬといえは、それはそのとおりだろう。しかし夏目漱石の「修善寺の大患」の例もあるように、病気の痛苦とそのひとの死生観とのあいだには、目にはみえなくても、ふかい相関がひそんでいることもすくなくない。その意味では、この種の病苦のうったえも、文人の病氣と死生観（たとえば「蘭亭序」）にみられる、人間存在への不安やおののき）の相関をかんがえるひとつの例として、文化的な価値を有するかもしれない。

病苦のうったえといえは、羲之の服食好みや、その先にある悲観的情緒との相関も、注目すべきだろう。すなわち祁小春『王羲之論考』（東方出版 二〇〇一）によれば、羲之はわかいころから服食（仙薬を服用すること）をこのみ、養生（長生をはかること）の二環として実践していた。だが、長期にわたるあやしげな仙薬の摂取が、人体によい影響をあたえるはずがない。尺牘中でうったえるさまざまな体調不良や悲観的情緒は、そうした彼の服食好みと関係があつたはずだ。祁氏はこう主張し、羲之の病苦のうったえや悲観的情緒は、その服食が原因だったのではないかと推測されたのである（四二四頁）。



たしかに『晋書』本伝に「王氏は世よ張氏の五斗米道に事つ」とあるように、羲之は道教、なかでも神仙道教を信じていた。くわえて羲之の友人に、許邁のような本格的な道士もいたので、羲之はそつとつ真剣に服食養生にはげんだようだ。そのためだろう、羲之の尺牘には、「五色石言散」「服散」「道家」「救命」のような、薬物や道教に関連した語彙がしばしばあらわれ、また葛洪「抱朴子」（神仙術の一環として、服食養生の術を詳細に説明している）と共通する用語もしばしば使用されていた。

祁小春氏が指摘されるような、病苦のうったえと服食と、そして悲観的情緒との相関を暗示する尺牘として、「追尋傷悼帖」（『右軍書記』193、『淳化閣帖』六46）があげられよう。ここで羲之は、

吾昨頻哀感、便欲不自勝拳。旦復服散、行之益頓乏。推理皆如足下所誨。然苦老矣。余願未尽、惟在子輩耳。一旦哭之。垂尽之年、將無復理。此当何益、冀小卻漸消散耳。

私は昨夜しきりに悲しみがつのり、たえがたい気分におちいりました。そこで今朝、また薬を服用したのですが、ますます衰弱してきました。どうしてか推測してみると、あなたのお説のとおりだと存じます。ですが、私は年をとってしまいました。心のこりは、ただ子どもたちのことだけです。それなのに、とつぜん幼女の死をいたむことになるうとは。私はすっかりおいぼれ、もう元気になることもありませんまい。

薬を服したとて、なんの益がましよ。ただちよつとも気分が楽になるのをねがうだけです。

とかたつている。この尺牘は、右でみた二幼女早世の直後に、かかれたものではないかと推測される。初句にてくる「頻りに哀感あり」が悲観的情緒のあらわれ、三句目の「服散す」が服食、そして四句目の「之を行うに益ます頓乏す」が病苦のうったえに相当しよう。この尺牘によると、このときの羲之は「たぶん、二幼女の早世に起因する」つる悲しみにたえられず、麻薬にすがるかのごとく薬物を服したわけだ。だが効果があったどこ

るか、逆にますます衰弱してきてしまった——という状況だったのだろう。

この尺牘中で「薬を服したとて、なんの益がありません」ともいつているので、羲之は薬の効能に疑念をもつこともあつたようだ。それでも、すこしでも薬効があればとおもつて、ズルズルと服食をつづけていったのだろう。「ただちよつとでも気分が楽になるのをねがうだけです」は、そうした心情をいつたものではあるまいか。このように、悲觀的情緒（哀感）と病苦のうつたえ（頓乏）と服食（服散）とは、どれが根源にあつたのかはわからぬが、にわとりと卵のように相互に因果をなしつつ、羲之の生活にふかく根づいていたのだろう。<sup>5)</sup>

またつぎにしめす「郷里人扱薬帖」（『淳化閣帖』七35、『三王帖』中13）は、服食養生への関心と疑念という矛盾した思いを、そのまま表白したものと見て、なかなか興味ぶかいものである。すなわち、

郷里人扱薬、有発夢而得此薬者、足下豈識之不。乃云服之令人仙、不知誰能試者、形色故小異、莫亦嘗見者、郷里の人が薬をさがしていたところ、夢のお告げでその薬（不老長生の薬）をみつけた者がいたそうです。貴殿はその噂を耳にしていますか。それを服用すれば「不老長生の」仙人になれるそうですが、でもためした者はまだいないようです。その薬、形や色はすこしちがっていて、まだ誰も見たことがないようなものなそうです。

というものだ。これによると、どうやら夢のお告げで、「服用すれば仙人になれる」という薬をみつけた者がいたらしい。「貴殿はその噂を耳にしていますか」のことはなど、羲之のはやりたつ気もちがよくつたわつてくる。それでも「ためした者はまだいないようです」といつて、半信半疑の反応もみせているのも、またおもしろい。「すこいなあ」という憧れと、「ほんとうかなあ」という疑念とが、ないまぜになっている——これが、羲之のこのときの反応だったのだろう。

同時代の葛洪『抱朴子』の記述などをよんでみると、不老長生の可能性が確信をもってかたられている。肉体をきたえ、精神を安定させ、そして仙薬を服食すれば、ひとはかならず延命し、長生も可能となる。夢うたがうことなかれ——と自信满满である。それゆえ『抱朴子』の記述を真につけてしまつと、当時の人びとはみな、不老不死をかたく信じていたようにみえる。だが、この羲之尺牘をよんでみると、羲之は葛洪ほどには、信じておらぬようだ。葛洪のような確信的な道教信者はべつにして、当時の人びとの服食や長生への反応は、この羲之のような半信半疑だったのであるまいか。こうしたことをしることができるのも、羲之尺牘の文化的な価値だといつてよからう。

さらに、つぎに紹介する「五色石膏散帖」（『東書堂帖』五、『全晋文』巻26）にいたっては、羲之がじつさいに服食、つまり薬物を摂取したときの感覚をかたつたものである。ここで羲之は、注目すべき発言をしている。

服足下五色石膏散、身軽、行動如飛也。足下更与下七、致之不。治多少、尋面言之。委曲之事、実亦遣人。

貴殿からもらつた五色散をのむと、身体がかるくなり、動きも空をとぶかのようでした。貴殿はその薬をもう七回分、私におくってくれませんか。どれくらい効果があつたかは、お会いした折りにもうしあげましょう。詳細については、また私から使者をつかわします。

ここで羲之がいう「身体がかるくなり、動きも空をとぶかのようでした」というのは、服用後の昂揚した気分をさすのだらう。いまぶつにいえば、麻薬や覚醒剤をつつたときのような感覚だろうか。羲之が服食にもとめたのは、もちろん終局的には不老や長生だつたにちがいない。しかしより直接的には、いま現在の病苦や悲しみをやわらげ、多幸福感を感じさせてくれることへの期待や願望もあつたのではないか。そうだとすれば、羲之たちが「危険だとしりつつも」服食にのめりこんでいった理由も、なんとなくわかつてくるような気がするのである。

義之の死後の話だが、義之の次男の王凝之（父とおなじく会稽内史となつた）は、父以上に神仙道教にのめりこんでいった。孫恩が反乱をおこして会稽にせめこんだとき、部下は凝之に防備をするよう進言した。ところが凝之は、一室にこもつて祈祷をするばかり。やがて部屋からでてくるや、「私が神にお願ひしたところ、鬼兵がたすけてくれることになつた。賊軍はやぶれるだろう」といつて、備えをしなかつた。そのため凝之は、孫恩の軍によつて殺害されてしまつたという。私見によれば、このとき凝之はおそらく「長年の薬物摂取によつて、鬼兵の幻覚をみてしまつたのではないか。その幻覚を幻覚とせず信じこんでしまつたのが、凝之の運のつきだつた。父の義之は「身体がかかるくなり、動きも空をとぶかのよう」な程度ですんだ。だが息子のほうは、生死を決する重大なときに、鬼兵がたすけてくれるという、とんでもない幻覚を信じこんでしまつたのである。

ただこの服食行為は、わるいことばかりではなかつた。そもそも、病苦をのがれようとすれば、祈祷や呪術ぐらいしかなかつた時代に、薬物を摂取しようとするのは、それじたい当時では、先進的な行為だつたにちがいない。くわえて、芸術家が薬物の力によつてイマジネーションを刺激され、すばらしい傑作をつみだしたというような話は、我われもよく耳にすることである。たとえばフランス近代音楽の巨匠、ベルリオーズの幻想交響曲。真偽は未詳だが、この名作は、ある若者（ベルリオーズ自身）が失恋のあまり薬物自殺をはかつた。だが致死量をあやまつて死にきれず、朦朧としたなかで奇様な幻想をみる。そして、その幻想のなかからある旋律がきこえてき、それによつてこの曲はかかれた——ということになっている。この場合は薬物摂取による幻覚が、フランスのほうに作用したわけだ。

ここで想像の翼をひろげてみれば、王羲之のころ流行した遊仙詩の創作においても、服食による同種の幻覚が、詩人のイマジネーションを刺激したのではあるまいか。当時の遊仙詩には、しばしば達観した仙人のすがたや、

清麗な仙境が描写されている。もちろん、それらは詩人の奔放な詩的造形によつたものであるが、一部には、ひじょうにリアルで具体的な描写もないではない。たとえば、羲之とほぼ同時代の郭璞（二七六～三三四）がづくつた「遊仙詩」其三（『文選』巻二一）をあげてみると、

翡翠戲蘭苕

かわせみが蘭の花とたわむれ

容色更相鮮

たがいに色あざやかだ

緑蘿結高林

緑のつたが高林にからみつ

蒙籠蓋一山

こんもりと一山をおおいつくす

中有冥寂士

その山中に隠者がいて

静嘯撫清絃

ちいさく口笛をふき琴の音をかなでている

放情陵霄外

自由きままで方外の地をさまよい

嚼蕊挹飛泉

花蕊を口にし泉水をくむ

赤松臨上遊

赤松（仙人）は上流にやつてき

駕鴻乘紫煙

鴻にのつて紫雲にのっている

左挹浮丘袖

左手で浮丘（仙人）の袖をとり

右拍洪崖肩

右手で洪崖（仙人）の肩をうつ

借問蜉蝣輩

蜉蝣のごとき俗人にきいてみたい

寧知龜鶴年

あなたたちは亀や鶴の長生ぶりをこ存じかと

というものである。かわせみが蘭にたわむれ、緑のつたが高林にからむ奥ふかい山中。そこで隠者は自由気まま

にすぎしている。すると仙人の赤松や浮丘、洪崖などが、山中の隠者のそばへやってき、ともに清雅な交遊をたのしみはじめた……。この詩は、当時の人びとの脳裏にあつた仙人や仙境のようすを、リアルに表現している。郭璞はこうした仙界のイメージを、どうやって造型できたのだろうか。過去の遊仙関係の詩文をよみ、その知識によつてのみ、この詩をつづつたのだろうか。

私見によれば、これにも服食とそれによる幻覚が、関係していたのではないかとおもふ。郭璞は、文学の才と卜占の術に卓越していたことによつて、その名を知られた人物である。だが彼は神仙世界にも、つよい関心をもっていたようだ。じつさい彼が神仙や服食養生への指向を有していたことは、過去の研究者もしばしば指摘してきたところである。<sup>10</sup> そうだとすれば、しかとした証拠はないのだが、私は、郭璞「遊仙詩」におけるリアルな仙界描写には、「読書によつて獲得した知識だけでなく」王凝之と同種の「服食による」幻覚がかかわっていたのではないかとひそかに想像するのである。

以上、羲之尺牘が有する文化的価値について、おもつことをのべてみた。おわりのほうは、すこし想像が飛躍しすぎたかもしれない。羲之尺牘はのこるべくしてのこつたものではなかった。ほんらい散逸してしかるべき短簡が、書き手が羲之だつたという事情によつて、たまたま現在まで残存してきたものだ。そうした、偶然によつて残存したという意味では、敦煌文献と似たような存在だといつてよく、我われがこれをよめることは奇跡的なほどの僥倖なのである。おかげで、整理も加工もされていない、なまの発言や心情に接することができ、また当時の知識人たちの日常生活を観察し、精神生活をつかがう縁よすがをあたえられた。これこそ羲之尺牘が有する、最大の文化史的価値だといつてよいであらう。

## 五、書簡と尺牘の連続性

ここまで尺牘の文章をみてきた。もともと王羲之の手紙は、身辺雑記をつづつた尺牘の類だけではない。文語による正統的な書簡文もきちんとつづっており、それらの何篇かは『晋書』王羲之伝に採録されている。客観的にみれば、尺牘よりこちらのほうを羲之の主要作だとすべきだろう。泉下の羲之からすれば、尺牘の文だけ云々されることは迷惑であり、むしろ正統的な書簡文のほうをよんでほしいのではないか。そこで以下では、羲之の正統的な書簡文（以下、書簡文）のほうをみていこう。

ただ、羲之の書簡文をよんでみたところ、尺牘と隔絶した違いがあるとはいいにくいようだ。たしかに書簡文は、どの作も正格の文語でつづられ、明白な口語ふう句法はぐっとすくなくなっている（ただし皆無ではない）。しかしながら、では『文選』に採録されてもよかつたほどの作かといえは、残念ながらそうとはいえない。当時の美文とくらべると、羲之の書簡文は四六句や対偶がすくなく、美的な文章とはいいがたいものであるからだ（『文選』は羲之の作を一篇も採録していない）。くわえて内容的にも、尺牘との連続性がたかいた感じられる作さえ、存しているのである。

そこでこの章では、羲之の書簡文のうちから、まず尺牘との連続性がたかい作をとりあげてみよう。すると、『史部郎謝万書』と題した書簡文があげられる。これは内容からみて永和十一年（三五五）、五十三歳の羲之が、会稽内史をやめてまもなくのころの執筆だともまれる。おかつた相手は、王氏とならぶ名門、謝氏の一員だった謝万という人物である。このとき吏部郎をつとめていた。

古之辞世者、或被髮佯狂、可謂艱矣。今僕坐而獲免、遂其宿心。其為慶幸、豈非天賜、違天不祥。

或汚身穢跡、

頃東游還、脩植桑果、今盛敷榮。率諸子、游觀其間。有一味之甘、割而分之、以娛目前。

抱弱孫、

雖植德無殊邈、猶欲教養子孫以敦厚退讓、戒以輕薄。庶令拳策數馬、彷彿万石之風。君謂此何如。

比当与安石東游山海、并行田視地利。頤養閑曠、衣食之余、欲与親知時共歡讌。雖不能興言高詠、銜杯引滿、語田里所行、故以為撫掌之資。其為得意、可勝言耶。常依陸賈班嗣、楊王孫之処世、甚欲希風數子。老夫志願尽於此矣。

いにしえの隱者は、髪をふりみだして狂人をまねたり、自分の評判や行動をわざとけがしたりするなど、なみたいていの苦勞ではありませんでした。ところが、いま私は、いながらにして俗世からのがれることができ、隱遁の宿願をかなえることができました。この幸運たるや、天からの賜りものではないでしょうか。もし天命にそむく「ことをして、また仕官する」と、不吉なことがおこることでしょう。

ちかごろ東遊から帰宅しました。桑樹をうえておいたのが、いま枝葉がしげっております。子どもをつれ、孫をだつこして、桑樹のあいだを散歩しています。うまいものでもあれば、みなでわけあつて、現今をたのしんでいます。私は徳たかき人間ではありませんが、それでも子や孫たちに誠実さと謙遜とおしえ、輕薄をいましております。可能ならば、策むちを手にして馬の数をかぞえた万石君のやりかたをみならいたいとおもっています。貴兄はどうおもわれますか。

ちかぢか、安石と東方の山海にあそび、ついでに莊園について、田地を觀察してこようとおもっています。



す。養生のひま、生活の余暇には、親戚の者や知人たちと一席を共にするつもりです。名言や好句を口にすることはできなくとも、まんまんの酒杯をのみほすことはできます。そして田舎のくらしをかたれば、お笑いのタネにはなることでしょう。そのたのしい気分は、口ではいえぬほどです。いつも陸賈や班嗣、楊王孫の処世術をみならって、その気風にならいたいとおもっています。老いぼれの願いは、ただこれだけです。

いかがだろうか。この文章が尺牘の仲間とされず、「与書」と題されてきたのは、その行文が正格な文語でかかれ、『晋書』本伝にも採録されていたからだろう。たとえば冒頭の「或被髮佯狂↓或汚身穢跡」二句は、羲之にはめずらしい対偶である。そして「遂其宿心」以下に四字句がつづくところなどは、いかにも文語らしさを感じさせる。<sup>(1)</sup>

しかしながらこの書簡文、文語ふう行文ではあっても、当時はやっていた美文のスタイルとは、まったく違ったものだ。そもそも対偶がすくない。この書簡中、対偶はさきの「或被髮佯狂↓或汚身穢跡」をのぞけば、ただ「率諸子↓抱弱孫」だけなのだ（全39句のうち対偶は二聯四句の10%）。また四字句については、前半は多用されているが、後半になると非四字句がおおくなって、これも美文の格調からはずれたものになっている。

くわえて、内容も典雅なものとはいいいにくい。ここで叙されるのは、官をさつて悠々とくつろいでいる羲之の日常である。「子どもをつれ、孫をだつこして、桑樹のあいだを散歩しています。うまいものでもあれば、みなでわけあって、現今をたのしんでいます」「田舎のくらしをかたれば、お笑いのタネにはなることでしょう。そのたのしい気分は、口ではいえぬほどです」など。こうした記述は、隠棲後の充足した日々を想起させるものではあろう。しかし客観的にみれば、じつにたわいないもので、むしろ尺牘中でつづつたほうがふさわしいくらい

の内容だ。こんな閑適ぶつゝの書簡、正史の本伝に引用する必然性があつたのかと、疑問に感じられるほどのものなのである（注15も参照）。

もう一篇、右とはべつの意味で、尺牘との連続性を感じさせる書簡をあげてみよう。それは「報殷浩書」と題する書簡文であり、これも『晋書』本伝にひかれるものである。かかれた経緯を紹介しておく、永和四年（二四八）、四十六歳の羲之は揚州刺史となつた殷浩から、書簡「遣王羲之書」をうけとつた。それは、「貴君はぜひ護軍將軍に就任するように」と勧誘するものだった。殷浩はどうか、仲のよかつた羲之を中央政府に招聘し、自分の片腕として協力してほしいと願つたようである。

ところが羲之は、この勧誘には気がすまなかつたようだ。そこで羲之は殷浩にむけて、つぎのような返書「報殷浩書」をおくつたのだ。以下、殷浩への返書を全文引用するが、ここでは、訳文のほうをじっくりお読みいただきたい。

「第一段」吾素自無廟廊志。直王丞相時、果欲内吾、誓不許之。手跡猶存、由来尚矣。不於足下参政而方進退。自兒婚女嫁、便懷尚子平之志。數與親知言之、非一日也。

「第二段」若蒙驅使、閑隴巴蜀、皆所不辭。吾雖無專對之能、直謹守時命、宣國家威德、固不同於凡使。必令遠近咸知朝廷留心於無外。此所益殊不同居護軍也。漢末使太傅馬日磾慰撫關東。若不以吾輕微、無所為疑、宜及初冬以行。吾惟恭以俟命。

「第一段」私は、もともとから廟堂につかえる気はありません。王「導」丞相のころ、私を廟堂にまねこつとされましたが、私はけつして同意しませんでした。そのさいの断り状はまだ手もとにあります。それはずっと以前からのことで、あなたが朝政に参画されてから、進退をかんがえたわけではありません。息子

が結婚し娘が嫁してからは、あの尚子平のように隠棲したいとおもい、しばしば親戚知友と相談しあいましたが、それは一日だけのことでありません。

「第二段」もし辞令をいただければ、関、罐や巴蜀の地であるつと、辞退するつもりはありません。私はいりっぱな外交の任はたせませんが、つつしんで朝廷の命をまもり、国家の威徳を宣揚いたします。そうしたことについては、平凡な外交官とはちがうはず。かならず遠近の者たちに、朝廷がどの地にも配慮していることをしらしめましょう。このことによる益は、護軍將軍の任にあつての益とはくらべものにならぬはず。漢末、太傅の馬日磾ばじついに關東の地を慰撫させたことがありました。もし私の輕輩けいはいぶりに目をつぶっていただけるなら、私は初冬になればまいります。私はつつしんで命をお待ちしております。

さて、いかがだろうか。この訳文をよんで、スムーズに意味がとれただろうか。前半（第一段）と後半（第二段）とで趣旨がくいちがっていて、真意が了解しにくかったのではあるまいか。羲之は前半では、廟堂（中央政府）につかえる気がないとあべついている。だが後半になると、なぜか俄然やる気をみせて、「もし辞令をいただければ、関、罐や巴蜀の地であるつと、辞退するつもりはありません」といつているのだ。こうした場合、齟齬そごした「ようにみえる」前半と後半との意味的連絡をとるべく、なんらかの説明的字句が布置されるのがふつうだ。ところが、この書簡ではその種の字句はいっさいおかれず、いきなり意味が反転しているのである。

このようにこの書簡文は、内容が前後でブツツと断絶し、かつ反転しているようにおもわれ、よむ者は狐につままれたような気分になってしまう。前半では仕官したくないといひ、後半では仕官したいといっている。それはわかる。だが、なぜ前後で反対のことをいふのか。羲之なりの理屈や論理があるのかも知れないが、なにもかかれていないので、さっぱりわからないのである。こうした場合、わからないのは、読者の読解力がおとつてい

るからだろうか。いやいや、そうではあるまい。「テキストに問題がないとすれば」義之の文辞作成能力のほうに、問題があつたとせねばならないだろう。

しかしながらこの書簡文、本文だけをよむと論旨がとりにくい、書簡を引用した『晋書』本伝の前後の文まであわせよむと、うすすらと真意がわかりかけてくるようだ。結論をいえば、義之の真意はどうやら「廟堂、つまり中央政府につかえるのはいやだが、地方官ならよるこんで就任したい」ということらしい。まずは、この書簡を引用する直前に布置された字句を、本伝からひこう。それは、

義之はわかいころから美譽につつまれていた。朝廷の公卿たちは才腕ぶりを気にいり、しきりに侍中や吏部尚書にまねいたが、義之はどれにも就任しなかつた。さらに護軍將軍（中央政府に属する）の地位をさざけられたが、これも辞退した。

というものである。これにつづくのが殷浩「遣王羲之書」（護軍將軍に就任するように勧誘した内容）と、右の羲之「報殷浩書」の引用である。そして本伝は両篇の引用がおわると、その直後に、

羲之は「中央政府の」護軍將軍の官を拜命した。すると「三年後に」また「地方の」宣城郡の太守の地位をつよく要求した。これは許可されなかつたが、それでも右軍將軍と会稽内史に任じられたのだった。

という記述がつづいている。ここの『晋書』の記述によれば、羲之は「報殷浩書」の前半で廟堂につかえる気がないといっておきながら「ことわりきれず、けつきよく護軍將軍のポストについたらしい。だが、やはりいやだったのだろう。三年後には転任をねがいで、念願の地方官（会稽内史。なお右軍將軍は名誉職ふう職位で、実質的な職務はなかつたようだ）」についたのだった。

この羲之伝の前後の部分まであわせよめば、このときの羲之の真意が推測できそうだ。つまり羲之は、中央政

府にはつかえなくなかった。だが地方官にはぜひなりたかった——ということだったようだ。そうかんがえれば、右の「報殷浩書」における前半と後半の齟齬「のように見える意味の反転」も、なんとか理解することができると。つまり前半で廟堂につかえる気がないとあてていたのは、それが中央政府につかえよとの招聘だったからだろう。そして後半で「もし辞令をいただければ」云々と、つよく仕官を希望していたのは、それが地方の官だったからなのだろう。

では、羲之はなぜ中央政府がいやで、地方官がよかったのか。これは本伝をいくらよんでも、わからない。なにもかいてないからである。ただ森野繁夫『王羲之伝論』はその難問を、つぎのように説明されている。すなわち、羲之の父、王曠は晋が南渡する前後、匈奴の劉聰との戦いでやぶれたが、討ち死にすることもなく、敵軍の降将となったらしい。これは名誉なことではない。それゆえ、もし羲之が中央政府につかえると、そうした名誉ならざる父の進退を、周辺からむしかえされる心配があった。だから羲之は、気らかな地方官のほうを希望したのだろう（同書六三頁）——と。この森野氏の説、父の王曠がほんとうに匈奴の降将になったのか、明確でないで、そのまま事実とは断定しにくい。ただ、そうかんがえれば、こうした羲之の奇妙な出处進退も、なんとか理解しやすくなるだろう。

というわけで、「報殷浩書」の内容が前後で齟齬する理由、そして羲之の真意が「あたっているかどうかはわからぬが」なんとか了解できた。ここまできて、ようやく「この書簡は羲之尺牘との連続性がたかい」という本筋の話題にもどれそうだ。いったいこの「報殷浩書」は、どうした点で羲之尺牘と連続性を有しているのか。それは簡単にいえば、「この書簡も状況に依拠した文だ」という点で、羲之尺牘と連続性を有しているのである。つまり、「親戚や友人がおしゃべりしたり、同僚どうしてワイワイしゃべったりしていると、おのずから固有の

言語空間ができてくるものだ。桃花源にのみ、仲間ことばが存するわけではない。全員がおなじ言語空間にいたなら、いわなくても了解してもらえ、一言いえばすべてわかってくれるのである」（前引の『錢鍾書 管錐編』中のことば）という尺牘の特徴が、まさにこの「報殷浩書」にも通用するのだ。

羲之と殷浩のふたりは、以前ともに征西將軍の庾亮につかえた旧同僚だった。その後も気やすく交際し、「いわなくても了解してもらえ、一言いえばすべてわかってくれる」関係だった。羲之からすれば、前半で仕官したくないといながら、後半で仕官したいと「いう齟齬した内容を」つづつたとしても、殷浩ならわかってくれるはずとおもっていたのだろう。だから羲之は、前半と後半とをつなげるような説明的字句、たとえば「でも、どうしてもということであれば」や「貴君もご存じのように、私は地方官につきたいのだから」などは、わざわざ挿入しなかつたのである。たしかに、気こころのしれた殷浩には、それでよかつたろう。だが後世の人間には、そうしたことはわからない。それゆえ、現代の我われには難解な文章にうつるわけだ。

ただし、尺牘との連続性という点では、もうひとつ指摘しておかねばならぬことがある。それは、この「報殷浩書」をつづろうとしたとき、羲之の心中では「尺牘をかくのとどうしよう」、「文章を美的につづろう」という意識が、希薄だったのではないかということだ。つまり羲之には、「書簡文は尺牘とはちがって、なかば公開のもので、慎重にかくべきだ」とか、「文章は経国の大業なので、書簡文といえども、きちんとかかねばならぬ」などの気がまえが、とぼしかったのだろう。おそらく羲之は、文語の書簡文といつても、しょせんは実用的な文章にすぎず、意味が通じさえすればよいぐらいの感覚だったのだろうとおもわれる。そうした姿勢は、けっきょく文学創作というものに対する緊張感のなさ、さらには羲之書簡の出来のわるさへとつながってゆくのだが、こうしたことについては後述することにしよう。

## 六、「与会稽王牋」の文章

以上、王羲之の書簡文には、尺牘と連続性がたかい作があることがわかった。では、それ以外の書簡文はどうだろうか。『晋書』王羲之伝には、前章であげた「与吏部郎謝万書」「報殷浩書」以外に、「遺殷浩書」「与会稽王牋」「与尚書僕射謝安(尚)書」「誠謝万書」という四篇の経世ふう書簡を採録している(そして書簡以外に「蘭亭集序」と「為会稽内史称疾去郡於父墓前自誓文」の二篇も)。

それら五篇のなかでもっとも重要な作は、朝廷の中枢にいた会稽王こと司馬昱におくった「与会稽王牋」だろう(牋ジャンルは貴顕のものにあてた書簡文をいう。また司馬昱はのちに践祚して簡文帝となる)。『晋書』王羲之伝によると、永和八年(三五二)、殷浩による初次の北伐の失敗をしまった五十歳の羲之(会稽内史だった)は、殷浩の後見役だった司馬昱にむけ、この失敗後の処方策を建白したのだという。場合によっては、東晋王朝の命運を左右しかねない「初次」北伐の敗戦処理。そうした重大事を論じた書簡文なので、羲之もつよい決意で執筆にのぞんだとおもわれる。じっさい、羲之の知力をつくした建白であり、畢生の力作だといってよい。ではその「与会稽王牋」は、どのような文章だろうか。

「第一段」古人恥其君不為堯舜。北面之道、豈不願尊其所事、比隆往代。況遇千載一時之運。顧智力屈於當年、何得不權輕重而処之也。今雖有可欣之会、内求諸己、而所憂乃重於所欣。伝云、「自非聖人、外寧必有内憂」。今外不寧、内憂已深。古之弘大業者、或不謀於衆、傾国以經濟一時之功者、亦往往而有之。誠独運之明、足以適衆、暫勞之弊、終獲永逸者可也。求之於今、可得擬議乎。

「第二段」夫廟算決勝、必宜審量彼我、万全而後動。功就之日、便当因其衆而即其寔。今功未可期、而遺黎殲尽、万不余一。且千里饋糧、自古為難。況今軫運供繼、西輸許洛、雖秦政之弊、未至於此。而十室之憂、

北入黃河。

便以交至。今運無還期、徵求日重。以区区吳越經緯天下十分之九、不亡何待。而不度德量力、不弊不已。此封内所痛心歎悼、而莫敢吐誠。

「往者不可諫、願殿下更垂三思、解而更張。令殷浩荀羨還據合肥、許昌譙郡梁彭城諸軍皆還保淮、為不來者猶可追。」

「可勝之基。須根立勢拳、謀之未晚。此實当今策之上者。若不行此、社稷之憂、可計日而待。安危之機、易於反掌、考之虛實、著於目前。願運独断之明、定之於一朝也。」

「第三段」地浅而言深、豈不知其未易。然古人処間閭行陣之間、尚或于時謀國。評裁者不以為譏。況廁大臣末行、豈可默而不言哉。存亡所係、決在行之。不可復持疑後機。不定之於此、後欲悔之、亦無及也。」

殿下德冠宇内、以公室輔朝。最可直道行之、致隆当年、而未允物望。受殊遇者所以寤寐長歎、寔為殿下惜之。國家之慮深矣。常恐伍員之憂、不独在昔、麋鹿之游、將不止林藪而已。願殿下

「暫廢虛遠之懷、可謂以救倒懸之急。」

「以亡為存、則宗廟之慶、四海有賴矣。」

「軫禍為福、

「第一段」古人は自分の主君が堯舜のごときでないのを、はずかしくおもつたものでした。臣下の道として、主君を尊位におしあげ、古代にならぶ盛世にするのを、ねがわぬ者はありません。まして千載一遇の



名君（穆帝）にお仕えしているのですから、なおさらです。ですが、自分（義之）の知力が以前よりおとるのをみれば、事からの軽重をはかつて対応するしかありません。現在は名君のよき時代ではありますが、わが能力をふりかえれば、喜びよりも心配のほうがおおきくなります。古書（『左氏伝』成公十六）に「聖人でないかぎり、外交がうまくゆけば、かならず内政に問題がおこるものだ」とありますが、現今は外交も不調ですし、内政にも心配ごとがつきません。過去の大業をなせし英雄には、衆人に相談せずとも、全力をあげて大功をあげるようなことが、しばしばあったものでした。ですがそれは、独力でなしうる明知が、衆人にかけてはなれてすぐれ、ちょっとの努力だけで、ながく平和な時代をたもたせる、そんな者だけが可能なことです。今日そんな人物をさがしても、どうしてうまくゆくはずがありません。

「第二段」さて、戦略によって勝利をえるためには、かならず彼我の力をはかり、万全の準備をしてから行動せねばなりません。そして勝利をおさめた日には、民衆の実態にもとづいた政治を心がけるべきです。いま勝利もおぼつかないのに、民衆は殲滅させられ、万にひとりもいきておりませぬ。また遠地への食糧輸送は、むかしから困難だとされております。ところが現今は転送があいつぎ、西は許や洛にはこび、北は黄河までという状況です。あの秦の圧政もこれほどでなく、民衆蜂起の恐れが各地にひろがっております。いま輸送に徴発されるや、帰郷できる日もさだかならず、徴集はきびしくなるばかりです。せまい呉越に依拠するわが国が、天下の十分の九をしめる敵方を計略しようとするれば、ほろびずにはおれませんが、自国の徳望や実力をかんがえなければ、失敗せずにはおれませんが、こうしたことは、国内の人びとが心をといたため慨嘆しているのですが、あえて口にだす者がいないのです。

「過去はどつしやうもないが、未来はなんとでもなる」（『論語』微子）といえます。どうか殿下、よく

お考えになって、いったん北伐軍をとどめ、再挙をはかってください。殷浩と荀羨じゆんぜんには軍をかえして合肥と広陵とに駐屯させることとし、また許昌、譙郡、梁、彭城の諸軍は、すべて退却させて淮水の線をまもらせ、強固な要塞をきづくのです。まず根拠地をつくり勢いをつよめてから、作戦を実施してもおそくありません。これこそが現今の最上の策です。この策をおこなわねば、わが国の憂いは、すぐに深刻なものになります。安危の機は掌てのひらをかえすよりはよいのです。今般の状況をみるに、危機は目前にせまっております。どうか独断の明をめぐらされ、一朝に決定していただけますように。

「第三段」身分がひくいのに重大な意見をのべたとき、なかなかききいれられぬことは、よく存じております。ですが、古人は村里や陣中においても、時流にそむいて国政を論議しましたが、論者はこれを批判しませんでした。まして私は大臣の末席をけがしておりますので、黙していわぬわけにはゆきませぬ。国家の存亡は、私の具申を實行するかどうかにかかっております。ぐずぐずして機を逸してはなりません。この場で決せねば、後悔してもおそいのです。

殿下は、徳は宇内に卓越し、皇族として朝廷を輔佐されています。正道によって政治をおこない、隆盛をもたらすべきなのに、まだ民衆の願いをみたしておりませぬ。ために、私も殊遇をつけた者どもは、日夜嘆息し、殿下のために無念におもっています。いまや国家の危機は深刻です。伍子骨の憂いは過去のことではなく、鹿のあそぶ地が林藪だけでなくなることを、私はいつもおそれております。ねがわくば殿下におかれては、無謀な計画はとりやめ、焦眉の急をお救いくださいますように。亡を存にかえ、禍を福に転ずることができれば、宗廟の慶事となりますし、四海の人びとに信頼されることと存じます。

この経世的内容をもった長篇の牋、内容によって三段にわければ、つぎのようになろう。まず第一段で、内外

多端ないま、知力おとろえた自分ではあるが、あえて建言する旨をのべる。そして第二段で、現状では殷浩は軍功をたてがたく、民衆も軍糧輸送で疲弊しているので、現今の北伐は中断すべきだと主張する。そして第三段で、どうか末臣たる自分の策をとりあげていただきたいと懇願して、一篇をむすぶ——というものである。この賤第一段や第三段は量的にすくなくないが、いわば枝葉の部分にすぎず、第二段こそが中心的な幹の部分にあたる。その幹の部分で、羲之は北伐の困難な状況をつたえ、ぜひ中断すべきであるとしてよく要請している。いままでみてきた尺牘も書簡文も、ともに自分とその周辺に關した内容であった。それに対し、この賤は国家の経営にふみこんだ本格的議論であり、羲之の政治家としての才幹を反映したものと云ってよからう。

では、この賤の文章をみてみよう。まず文体は、口語の類はまじえず、正格な文語で終始している。朝廷の高官への賤である以上、これはとうぜんだろう。また羲之にしてはめずらしく、文中に古言や故事（「左氏伝」や「論語」からのことば）を引用している。これは説得力をたかめるとともに、格調たかくしようとしたのだろう。さらに「豈に……や」「何ぞ……や」「……而已」「……矣」の言いかたで語気をつよめ、「秦政の弊なりと雖も、未だ此に至らず。」や、「後に之を悔いんと欲するも、亦た及ぶ無きなり」や、「国家の慮たるや深し矣」などの表現で、現今の危機的状況を強調しているのに注意しよう。いっぽう内容のほうも、「こうしたことは、国内の人びとが心をいたため慨嘆しているのですが、あえて口にだす者がいないのです」「殿下は「正道によって政治をおこない、隆盛をもたらしべきなのに、まだ民衆の願いをみたしておりませぬ」などと、いかにも「骨鯁」のひとつらしい直言をおこなっている。このようにこの賤は、表現も内容も切迫した感じを有するが、これは、このときの羲之のつよい危機感を反映しているのだろう。

そうした「与会稽王賤」だが、この賤の文章も、六朝期の作としては、たかく評価できないといわねばならな

い。どうしてかという点、第一に、この賤でもやはり、対にととのえた句がすくないからだ。一篇九十九句中、対偶は四聯八句のみで、対偶率はわずか8%。しかもその数すくない対偶をみてみると、たとえば「西輪許洛↓北入黄河」は、結果的に対偶になったというレベルのもので、意図したものとはかんがえにくい。また「暫廢虚遠之懷↓以救倒懸之急」と「以亡為存↓転禍為福」では、「暫」と「以」と「転」を無理に対応させるなど、整齊したものではない。むしろ下手な対偶というべきだろう。さらに「往者不可諫↓来者猶可追」にいたっては、『論語』の引用にすぎず、義之の文ではないのである。このようにこの作の対偶は、六朝期の文章作品としては、質量ともレベルがひくいものだ。もし陸機や潘岳だったら、同種の内容であっても、もっとすぐれた対偶をつづつたに相違ない。

ここで留意したいのは、この対偶の貧弱ぶりは、義之の能力というよりも、意欲のほうに原因があるのではないかということだ。というのは、ちょっとくふうすれば対偶にできそうな字句でも、義之はなぜか対偶にしないからである。たとえば、

誠独運之明、足以適衆、

暫勞之弊、終獲永逸者可也。

誠に独運の明の、以て衆に邁すすぐるに足り、暫勞の弊の、終に永き逸たのしみを獲る者にして可なり。

今外不寧、

内憂已深。

今外は寧やすらかならず、内憂は已に深し。

伍員之憂、不独在昔、

麋鹿之游、将不止林藪而已。

伍員の憂は、独り昔に在るのみならず、麋鹿びやくの游は、将まさに林藪とどに止まらざんとするのみ。

などは、対偶にととのえようとすれば、すぐできたことだろう。一例目は「足以適衆」と「終獲永逸」を、二例目は「今外」と「内憂」を、それぞれ字句をいれかえて対応させれば、すぐに対偶になったはずだ。また三例目にいたっては、四句目「将不止林藪而已」の「将」字さえけずれば、

「伍員の憂、不独在昔、

「麋鹿之游、不止林藪而已。」

という隔句対にできたことだろう。「而已」はあってもよい。ところが羲之はそれをしなかった。どうしてか。それは、対偶にできなかったのではなく、しようという意欲がなかったからだとおもわれる。これはある意味で、能力がないことより、もっと重症だといわねばならない。けんめいに努力して、それでもよい成績がとれないのだったら、まだ将来に希望がもてるだろう。ところが、そもそも努力する気がなかったら、どうしようもないからである。

「与会稽王牋」がたかく評価できぬ理由の第二として、典故や用語の魅力のなさがあげられる。この牋は北伐の作戦を論じ、いったん中断すべしと建白したものだ。すると、文中に使用される典故や用語としては、史書や兵家関係のものが予想されよう。じっさい、この牋中の主要な典故や用語の出典をあげてみると、

「論語」 求諸己 / 往者不可諫、来者猶可追 / 三思 / 直道行之

「春秋左氏伝」 自非聖人、外寧必有内憂 / 度德量力 / 社稷之憂

「史記」 比隆 / 千載一時 / 安危之機 / 倏連麋鹿之游 / 転禍為福

〔漢書〕解而更張／易於反掌

〔孫子〕廟算／千里饋糧／不可勝

〔抱朴子〕暫勞之弊、終獲永逸者／十室

〔諸葛亮前出師表〕可計日而待／殊遇

というものである。

これらの出典一覧をみると、どれも実用に徹したものであり、修辭的意匠をこらした典故とはいいいにくいようだ。つまり「役にたたせる」ことに重点があつて、「文をかざる」意欲にはとぼしいように感じられる。まず『論語』や『春秋左氏伝』などは、当時の基礎教養といふべき書物であり、おのが主張に重みをそえようとして布置されたものだろう。ついで『史記』や『漢書』の史書類も、この賤が北伐の是非を論じるものであれば、『戦いの記述にとむ』これらの書の典故は有用だったはずであり、とうぜん使用されてしかるべきだろう。また『孫子』も軍事に關した内容をふくむので、この賤中に登場するのも納得できるものだ。それゆえ以上の諸書は、北伐を論じた文書を執筆するとすれば、だれもが使用するような出典だといつてよからう。

すこし個性が感じられるのは、葛洪『抱朴子』と諸葛亮「前出師表」だろう。前者は、羲之が神仙道教に關心をもつていた（前述）ことの反映だろうし、後者は、彼の蜀地へのあこがれ（尺牘でよく話題になつてゐる）に關したものとかがえれば、やはり使用が了解できるものである。

いっぽう、文學的立場からみて意外に感じられるのは、『楚辭』や漢賦の類が、ほとんど使用されていないことだ。『楚辭』や漢賦は、華麗な文學用語の宝庫といふべき出典であり、六朝美文ではこれを多用することがおおい。ところが、この賤ではそれらを使用せず、そのため全体的に華麗さにとぼしい文章になつてしまつてゐる

くわえて、経書のなかでも文学にちかい『詩』の典故もつかっていない。こうした地味な出典傾向、この作が朝廷の高官への賤であり、内容も政治的な話題だったので、ある程度はやむをえなかつた側面もあつたろう。しかし、羲之の他の書簡でも、おなじような出典傾向であること、他の同時期の文人は「同種の作でも」けっこう『楚辞』や漢賦の典故を使用していること——などからみると、やはり羲之の個人的な好みも関係しているのではないかとおもわれる<sup>12)</sup>。

さらに、当時の詩文によく登場する優美な印象を有する新語も、羲之は発明力がとぼしかつたようだ。この賤をはじめ、羲之の書簡文に新語はすくなくないのだが、魅力的なものはおおくない。この種の優美な新語を創案するには、やはり詩賦の類をよんでいないと、むづかしいだろう。ところが、右の出典傾向から推測するかぎり、羲之の読書は、基礎的かつ実用的な経史類がほとんどで、『楚辞』や漢賦をはじめとする文学作品にはおよんでいなかったようだ。これでは優美な新語を発明できなかつたのも、とうぜんだったとせねばならない。

このように、「与会稽王賤」の典故や用語は、使用した必然性がわかりやすいものではあるが、べつの言いかたをすれば、予想された書物が予想されたとおり使用されているにすぎない。常識的であり、実用的であり、いささか陳腐にさえ感じられるものなのである。その意味では、文学的立場からみれば、意外性がとぼしく、華麗さにも欠け、あまり魅力のあるものではないといつてよからう。

## 七、桓温「薦譙元彦表」との比較

右の章では、王羲之の文語の書簡文のなかから「与会稽王賤」をとりあげ、六朝期の文章としては、たかく評

価できぬことをのべてきた。ただそういっても、「いまひとつピンとこないなあ」といわれるかたも、おられるかもしれない。文章の出来のわるさを実感してもらったためには、やはり同時期の出来のよい同種の作と比較して、「ここがこのようにちがうから、ダメなのだ」と具体的に指摘する必要があるだろう。

そこで、出来のよい作として桓温「薦譙元彦表」の文章をとりあげ、羲之「与会稽王牋」と比較してみよう。桓温（三一二―三七三）は羲之と同時代の軍閥であり、野心的な政治家でもあった。彼は歴史上は、おのが軍勢力を背景に、東晋王朝を篡奪しようともくろんだ人物として著名になっている（最終的には失敗した）。そうした桓温だが、彼は永和三年（三四七）、蜀の地に侵入して氏族の李勢（成漢と称して自立していた）を圧倒し、東晋に吸収することに成功したのである。そのさい桓温は、当地で譙秀あざなは元彦というすぐれた人物をみだし、朝廷に推薦した。その推薦書がこの「薦譙元彦表」なのである。

この作が出来がよいというのは、私の主観できめつけているのではなく、「文選」がこれを採録しているからだ（巻三十八）。「文選」が採録した以上、当時この作は名作だと認定されていたはずであり、羲之の牋と比較するのに都合がよい。まずは桓温「薦譙元彦表」の全文をあげてみよう。

臣聞 太朴既虧、則高尚之標頽、

道喪時昏、則忠貞之義彰、

是故上代之君、莫不崇重斯軌、所以篤俗訓民、

靜一流競、伏惟大晉、

神州丘墟、免置絶響于中林、

三方圯裂、白駒無聞于空谷、

斯 有識之所悼心、

大雅之所歎息者也。

運無常通、

時有屯蹇。



陛下聖德嗣興、方恢天緒。臣昔奉役、有事西土。鯨鯢既懸、思宣大化。訪諸故老、搜揚潛逸、庶武羅于羿浞之墟、竊聞巴西譙秀、植操貞固。抱德肥遯、揚清濯波。于時「皇極邁道消之会、想王蠋于亡齊之境。」

「中華有顧瞻之哀、凶命屢招、身寄虎吻、而能抗節玉立、誓不降辱。」

「幽谷無遷喬之望。」

「姦威仍逼、危同朝露。」

杜門絕迹、不面偽庭。

「進免龔勝亡身之禍、雖園綺之棲商洛、方之于秀、殆無以過。」

「退無薛方詭對之譏。」

「管寧之默遼海、

于今西土、以為美談。夫

「旌德礼賢、化道之所先、方今六合未康、

「崇表殊節、聖哲之上務、

「豺豕当路、

遺黎偷薄、義声弗聞。益宜

「振起道義之徒、若秀蒙蒲帛之徵、足以鎮靜類風、幽遐仰流、

「軌訓羣俗、九服知化矣。」

（要約）太古のころ、賢者や清廉な者がおりまして、君王たちは彼らに敬意をはらったものでした。現今の晋朝においては、いろんな災禍におそれ、賢者や清廉な者がすっかりいなくなっております。ところが私は最近、命を奉じて蜀に進攻して賊軍をやぶり、当地を晋朝の支配下におきました。そこでりつぱな人物をみつけることができました。巴西の譙秀、あざなは元彦がそのひとです。この蜀の地は、ついでこのあいだまで賊どもに蹂躪され、この譙秀も仕官を強要されておりました。しかし、彼はそれをがんとして拒否しつづけ、ずっと孤高をたもってきたのです。徳あるひとを称賛し、賢人を厚遇するのは、教化をすすめる正道であり、聖主のなすべき務めでもあります。こうした混乱した時勢においてこそ、この譙

秀のごとき賢者を招聘して、世の道義の士を鼓舞し、悪風を一掃すべきであります。もし譙秀の晋朝への招聘が成功したなら、きっと世間の風俗は改善し、教化もゆきとどくことと存じます。

はじめに桓温の表の対偶をみてみよう。右の原文を一瞥すれば、対偶のおおさがすぐわかる。全71句のうち42句が対偶を構成し、対偶率は59%にもほっている。さきにみた羲之「与会稽王牋」の対偶率が8%だったことを想起すれば、その差は一目瞭然である。それゆえ、この桓温表は六朝時に理想視された美文であり、羲之牋のほうはそうでないということが、はっきり断言できるのだ。桓温の表が『文選』に採録され、羲之の牋がそうでなかったのは、この対偶率の差も関係していよう。

羲之の文章に対して、「当時は玄学が流行して哲理を重視していたので、対偶などの文飾は留意しなかったのだらう」という弁護ふう議論がなされることがある。しかし文章創作の立場からいうと、それはためにする遁辞にすぎない。当時にあつて、行文を対偶にととのえるということは、玄学の流行や哲理の重視などとは関係なく、一流の文人としてあたりまえの素養であり、文章技巧であつたからだ。そのあたりまえが、桓温はでき、羲之はできなかったのである。

つぎに桓温表の典故をみてみよう。ここでは『文選』の李善注によって、桓温が依拠したとおもわれる典故の書名をあげてみると、

〔経書〕詩、左氏伝、易、尚書、論語、論語比考讖

〔史書〕国語、漢書、史記、魏志、何法盛晋書

〔子書〕莊子、文子

〔文学〕琴操、曹丕令、劉歆移書、阮瑀書、漁父辞、潘岳賦、陸機表、博物志、後漢順帝詔

となった。この出典リストで注目したいのは、経書や史書以外に、集部に属する文学作品が、けっこう使用されているということだ。義之の牋では、こうした典拠はつかわれていなかった。とくに漁父辞や潘岳賦、陸機表などは純然たる文学作品であり、注目されてよい。

こうした出典の相違は、作者たる桓温のふだんの読書傾向、ひいては教養のありかたを反映している。作者の教養がちがえば、出典傾向はもちろん、そのひとの文風にも、微妙なちがいがでてくるものだ。では、文学作品を典拠にひかぬ義之の牋と、多用する桓温表とのあいだには、どのような文風の相違がでてきているのだろうか。この典拠と文風の相関の問題は、微妙なところをふくんでいるので、一概にはこうといいくいのだが、しいて説明してみよう。

まず文学作品を典拠につかった「桓温表の」つぎの一節をみてみよう。この一節は、李勢の独裁によって蜀の人びとが苦難にあえいでいる、とのべた場面であり、

竊聞巴西譙秀、植操貞固。抱徳肥遯、揚清涓波。于時 皇極遘道消之会、中華有願瞻之哀、

群黎蹈顛沛之艱。幽谷無遷喬之望。

私は、巴西の譙秀なる人物は節操をまもること堅固で、徳たかき者でありながら隠棲し、清廉ぶりをつらぬいている、ときいています。李勢が支配していたとき、蜀では政道がうしなわれ、民衆は塗炭の苦しみをあじわっておりまして。かくして都邑では賢者が「衰亡した世相を」觀望して悲痛にくれ、幽谷では仕官できる望みもありませんでした。

という文章だ。この部分の典拠を、李善注などによりつつ提示してみれば、

(1) 貞固——「易乾卦」貞者事之幹也……貞固足以幹事。(2) 抱徳——「文字守靜」養生以經世、抱徳以終年、

可謂能体道也。(3)肥遯——「易遯卦」上九、肥遯、無不利。(4)揚其波——「屈原漁父辭」世皆濁、何不滌其泥、而揚其波。(5)清渭——「潘安仁西征賦」北有清渭濁涇、蘭池周曲。(6)皇極——「尚書洪範」皇極、皇建其有極。(7)道消——「易泰卦」內陽而外陰、內健而外順、內君子而外小人、君子道長、小人道消也。(8)群黎——「詩小雅天保」群黎百姓、遍為爾德。(9)顛沛——「陸機謝平原內史表」遭國顛沛、無節可紀。(10)顧瞻——「詩檜風匪風」顧瞻周道、中心怛兮。(11)幽谷・(12)遷喬——「詩小雅伐木」出自幽谷、遷于喬木。

となろう。このなかでは、(1)(3)(7)など「易」に由来することばがおおいが、これは当時の玄学の流行を反映したものだらう(2)『文字』もおなじ)。桓温は軍人でありながら、清談も得意にした教養人だったので、いきおいこの種の玄学ふう書物も利用したのだらう。

ここでは四句目の「揚清渭波」とその典拠の(4)と(5)とに注目しよう。この句で桓温は、羲之牋では使用されなかつた辞賦の典拠、すなわち屈原「漁父辭」と潘岳「西征賦」をつかっている。使いかたも巧妙で、前者の「不漏其泥、而揚其波」と後者の「清渭濁涇」とを合して、「揚清渭波」という字句をつづりなしたのだ。桓温はたぶん、ふだんから「羲之とはちがつて」辞賦の類をこのみ、その表現に通じていたのだらう。だから、この表のこの部分をつづろつとしたとき、この両典拠をさつと想起し、その字句をおりこむことができたのである。

くわえてこの「揚清渭波」句は、譙秀の清廉な人からを比喩的に「清渭の波を揚ぐ」(清らかな渭水の波を揚げる) 清廉さをつらぬく)と表現しているのに注意しよう。この「清渭の波を揚ぐ」なる表現、通常の書きかたをすれば、「身を清くし己を潔くす」(清身潔己)とでもかくところである。しかし桓温はそうした、平凡でおもしろくない措辞をきらって、こうしたシャれた比喩的表現をつづつたのだ。つまり、桓温は「役にたたせる」ことより「文をかざる」ことを重視して、辞賦由来の字句を自分の文にはめこんだのである。こうしたと

ころに、桓温の「羲之にはなかつた」幅ひろい教養と、そしてすぐれた文学センスとをみいだすことができよう。つづく聯でも、興味ぶかい措辞がつづく。まず「皇極」の聯では、下句の「蹈顛沛之艱」（顛沛の艱を蹈む）に注目しよう。ここは李善注によると、陸機「謝平原内史表」の「遭国顛沛」（国の顛沛に遭つ）をふまえるという。対する「遵道消之会」が『易经』泰卦をつかっているので、桓温は陸機表を經書と同等の重みをもたせたことになる。ちいさなことだが、桓温の意識では陸機の文は、そうとうの重みをもっていたことがうかがえる。

またあとの「中華」の聯では、下句の「遷喬」の語に注意したい。これは直前の「幽谷」の語とともに、『詩』伐木の「出自幽谷、遷于喬木」（幽谷より出でて、喬木に遷る）に依拠した表現である。だが「幽谷」は典故そのままだが、「遷喬」のほうは「遷于喬木」句の「于」「木」をけずって、二字の聯語「遷喬」にしたている。この「遷喬」の語は、これ以前あまり用例をみず、ほぼ同時代の劉琨「答盧諶詩」に一例みえるのみである。その意味では、桓温は斬新な典故の翦裁をおこなっているといつてよい。これも些細なことかもしれないが、桓温のりのくふうをみとめてやるべきだろう。

ここまで典故をみてきたが、この桓温の表では典故によらぬ用語も注目される。それは、以前に用例のない新語の創案と、その使用である。新語をつくり使用することは、羲之の牋でもあつたことであり、六朝ではめずらしいものではない。しかしその新語が、とくに秀逸だったり、優美だったりしたとき、その「語をつかった」詩文は、いかにも六朝ふうの清新な作となる。桓温表には、その種のすぐれた新語がおおいのである。この桓温の表でそうした新語の例をあげれば、「玄邈」（孤高である）、「在三」（父、師、君をおもんじる）、「流競」（混乱する）など、枚挙にいとまがないほどだ。

たとえば「玄邈」の語は、直前に「洗耳投淵」があるので、おそらく「隱者ふうの「孤高をたもつ」の意だ

るうが、「玄」字をつかったのが桓温の発明で、いかにも六朝ふうの新語となっている。また「在三」は、典故をもとにした新語である。ここの「三」は父、師、君の三者をいい、『国語』晋語の「民は生まれて三に于いてし、之に事<sup>つか</sup>ふること一の如し」にもとづく。桓温はそれをふまえたうえで、「在三」という新語を案出し、さらに「在三之節」とひきのばして、「父、師、君をおもんじる礼節」の意をもたせたわけだ。じつに巧妙な新語だといえよう。また「流競」は、五臣注が「奔競」といいかえているので、「混乱する」の意だとおもわれる。この場合は、「奔」でなく「流」字をつかって「流競」としたのが、桓温のくふうだったのだらう。水の激流のごとく流浪し、あわてふためいている感じを、この新語にこめたかったのだらう。

以上、新語「のごく一部」を解説してきたが、いずれもヒネツた用字であり、用語だといってよからう。なぜ桓温がこつした新語を案出できたのかといえば、彼が詩文もふくめた幅広い読書をしてきたからだらう。經史に登場する出来あいの語を、さつと自分の文章にもつてくれば、簡単に文章がかけるし、らくだったにちがいない。しかし、通常ならむすびつかぬA字とB字を結合させて、「AB」という二字の聯語をつくりあげるのは、そうそう簡単なことではなかったはずだ。A字とB字との相性や、できた聯語の語感のよしあし等もあって、いかげんなことでは清新な語彙はつくれない。そのあたりは先人の詩文をよんで、みずから体得してゆくしかないのである。桓温はこつした苦勞をしてきていたので、こつした用語をくふうすることができたのだらう。もし彼が古典（經書や史書）だけしかよんでなければ、こつしたすぐれた新語は創案できなかつたに相違ない。明の孫月峯がこの桓温の表を

約以華語勝、然惟其不甚華、所以猶有雅味。

まとめれば、この文は語彙の華麗さですべてれている。といつても過度にはわたっていない。だから、

ほどほどの雅味を有しているのである。

と評したのも、なるほどと納得できよう。

ここまで、桓温「薦譙元彦表」の対偶、典故、そして新語をみてきた。だが、私が桓温の表で指摘したいことは、ただ右のごとき修辭のくふうだけでなく、それによって生じてきた、いわゆるいいがたい雅趣（文学性といつてもよからう）のほうなのである。この雅趣なるもの、なかなかことばでは説明しにくいものだが、しいて私なりにときあかしてみよう。

たとえば、さきにもみた対偶、

「中華有顧瞻之哀。

幽谷無遷喬之望。」

都邑では賢者が「衰亡した世相を」觀望して悲痛にくれ、幽谷では仕官できる望みもありませんでした。をもついちごご覧いただきたい。この対偶、上句は『詩』匪風をふまえて、賢者が世相の混乱をなげいたものであり、下句はやはり『詩』伐木をふまえて、賢者が仕官できぬ無念を叙したものである。この二句は、李勢支配下の蜀地で、賢者たちが不遇な境遇にいたことを、かたつたものと解せられる。ただそうした解釈は、典拠を理解してはじめて可能になるものであり、その意味では術学的で難解な表現だといってよいかもしれない。だが六朝ふうの文学觀からみたときは、この二句は平衡した対偶のなかで、ゆたかな古典的連想をまとわせた、格調たかい表現だと評することもできよう。桓温の表には、この種の典故を利用した婉曲な表現があちこちにあつて、行文にゆたかな含蓄をもたらせ、奥行きゆたかい内容にしているのである。

そのうえ、この二句の奥には、ふかい寓意がひそんでいる。すなわち旧時では、知徳すぐれし為政者が政治を

とるや、かくれていた賢者たちもみな世にでて官位につき、国家は安定してくるといふ考えかたがあった。いわゆる「野に遺賢なし」(『尚書 大禹謨』)である。すると、李勢の支配下では、蜀の賢者たちは不遇をかこつていた。だが自分(桓温)が蜀の政務をとるや、すぐ野にいた遺賢(譙秀)をみいだし、かく表の文をつづつて朝廷に推薦している——ということになる。これにより、とおまわしに自分のよき為政者ぶりを、東晋王朝に印象づけようとしているわけだ。その意味で、これはじつにたくみな文章なのである。

以上のべてきた古典的連想、格調たかき、婉曲さ、含蓄、奥行き、寓意、これらをすべてひっくるめたものが、雅趣「であり、また文学性」だといってよからうか。そしてこの雅趣をうみだすのが、対偶や典故、そして比喩などの修辞技巧なのである。

もっとも、これらの修辞技巧は、文辞をつづるさい、かならずしも必須のものではない。右のごとき内容は、対偶でなくても表現できたはずだし、典故をつかわなくても意味はつたえられたらう。じつさい、孔子の発言として、「辞は達するのみ」(『論語 衛霊公』)ということばが、つたえられている。このことは、やや意味内容がいまいなのだが、もし「辞は達すれば則ち足る。文艶の辞を煩さず」(何晏集解)の意だとすれば、「文章というものは、意味が通じさえすれば、それでよい。修辞などは不要だ」という主張になる。羲之の文章創作のしかたは、たぶんこちらにちかいのだろう。

だが、桓温は「たぶん」そうした「辞は達するのみ」では満足しなかった。彼はむしろ『左伝 襄公二十五年』の「言の文無きは、行へども遠からず」(かざりがいいことばは、ちかくには通じたとしても、とおくまではつたわつていかない、の意)の考えかたにもとづき、対偶や典故などで積極的に文をかざったのである。そうしたやりかたこそ、六朝に風靡した美文の創作精神に合致したものだ。そして羲之がもとづいた「辞は達するの



み」のほうは、すくなくとも六朝ではよしとされるものでなかつたのである。つまり桓温の「薦譙元彦表」は、六朝ふう文学觀にマッチした、雅趣やそれをつみだす修辭を重視する精神によつてつづられていた。だから「そ、たんなる政治的実用文でなく、いわくいいがたい雅趣をそなえた文学作品とみなされ、『文選』にも採録されるにいたつたのである。

#### 八、天は二物を与えず

以上の桓温表との比較によつて、王羲之「与会稽王牋」は経世ふうの実用的文章であり、六朝の文学作品としては、たかく評価できぬものであることが、実感できたのではないかとおもつ。いままでみてきた「与吏部郎謝万書」「報殷浩書」「与会稽王牋」以外の羲之の書簡も、おおむねこれと似たような性格をもっている。いずれも経世に関連した内容をもっており、そのためか行文も実用的であつて、文学的には雅趣にとほしいものばかりだといつてよい。

たとえば「遺殷浩書」という書簡文。この書は「与会稽王牋」とどうよう、初次の失敗にもこりずに、再度の北伐をくわだてている殷浩に対し、疲弊した国内状況をかたりながら、つよく中断をせまったものである。この作に対しては、

此豈舒箋点翰、雕章琢句者所能出此。(俞文豹「吹劍録」)

この作たるや、紙筆を手にして、美辭麗句をつらねるだけの者など、どつしてかけるはずがあるつか。

羲之在東晉諸名士中、具有經濟之才、非徒以文雅見長。(康熙帝「古文評論」)

羲之は東晋の名士では経世の才を有しており、ただ文雅にすぐれただけの人間ではない。

という好意的な評もなされている。<sup>(14)</sup> たしかにこの書簡をよむと、羲之がつよい使命感をもちつつ、真摯に忠告しているのが了解できる。一読して経世への責任感がつたわってくる、力作の書簡文だといってよかる。ただし、文章作品として「文学的立場から」みた場合、さきの「与会稽王牋」とおなじく、美文とはほどとおい行文であり、たいして雅趣は感じられぬものだといってよい。

いっぽう、「与尚書僕射謝安(尚)書」のほうは、「会稽内史たる」羲之が直面する会稽の困難な状況を、謝尚にむけて叙したものである。ここでは、北伐の食糧輸送に従事する民衆の困惑を強調し、その対処法を詳細に述べられている。これも経世に關した書だといえはそのとおりだが、天下国家に關する重要な政策変更を論じたものではなく、会稽地方に限定した事からを叙したものである。

この書簡文に対して、やはり清の康熙帝は、

羲之觴詠風流、雅興逸致。乃能留心実政、不祖尚清虚、真中流砥柱矣。

羲之は酒や詩などの高尚な遊びにふけり、たいへん風雅な生活をしていた。それでも経世にも心をよせ、清談に感溺しなかつた。彼こそは激流中、屹立した山のような人物だ。

と評している(同右)。おもつに、北伐による民衆の困苦ぶりを詳細に叙したことが、「経世にも心をよせ、清談に感溺しなかつた」という褒辞をよびよせたのだらう。しかし私見によれば、文章に關していえば、「与会稽王牋」や「遣殷浩書」より出来がわるいもので、ダラダラと締まりのない行文がつづくだけのものだ。実務的内容をこまかにつづっているの、どうしても修辭的洗練には手をぬきがちだったのだらう。

ところで右の旧時の批評からみると、羲之書簡文は、どうやら北伐の中断を主張するとき、広義の経世ふう

内容が、後世の人びとに好印象をあたえたようだ。そのため「屹立した山のような人物」のごとき評言をつんだのだろう。こうした評語からうかがえることは、宋の俞文豹が「紙筆を手にして、美辞麗句をつらねるだけの者など、どつてかけるはあろるか」というように、旧時では、経世ふう内容と美辞麗句の否定（古文への接近）とが、ややもすればむすびつけられやすかった、ということである。

そうした例として、清の張習孔の批評があげられる。彼は、経世ふうな内容をもつ羲之の書簡文に対して、つぎのような批評をくだしている。すなわち、

六朝文学靡陋、独王逸少高古超妙、与諸家絶異。史言韓退之文起八代之衰、吾謂不当先退之而後逸少。不知世人許我否。

六朝の文学は粉飾がすぎているが、王羲之の文だけは高古にして卓抜しており、他の文人とはぜんぜんちがっている。文学史上で、韓愈の古文は八代の衰をすくったと称されるが、私は、韓愈を王羲之よりたかく評価すべきではないとおもふ。世間の人びとはこの考えに賛同してくれるかどうかはしらないが。

というものだ（『雲谷臥余』巻十三「王逸少文」）。ここの「高古超妙」という語は、前後から判断すれば、内容でなく行文についていっているようである。具体的には、対偶等の修辭がすくなく、簡潔の妙趣があるというのだろう。だから韓愈の古文をひきあいにだしているわけだ。経世ふう内容だから、「美文ではなく」高古超妙、つまり古文ふうだといいたいのだろう。

こうした見かたは、現代の研究者にも連綿とつづいているようだ。たとえば、顧農氏は御論「王羲之的散文」（『古典文学知識』二〇一四 三）において、羲之は重要な散文作家であり、よく文章をつづれた人物だったとする。そしてその文章作品をとりあげて、

「与会稽王牋」の文章は、すこしも玄学ふう空虚さがなく、行文にかざりもない。簡潔明快にして、たいへんすぐれた政論である。東晋ではほとんどみられぬもので、散文史上の佳作であり名篇だろう。「玄学にこつた連中は」身は高位にありながら「玄妙な哲理」にふけることによって、これまでずっと国家をあやまらせ、民衆をくるしめてきた。『晋書』王羲之伝や『資治通鑑』は、羲之の軍事や政治を論じた書簡をおおく引用しているが、それは羲之の見解をよしみとめたからだろう。……羲之は、現実から遊離したおおくの清談家とはちがって、まちがいなく経世の才能を有していた。彼はあとになって忽々と隠棲してしまったが、これは当時の大局にたつていえば、じつにおいしいことをしたものだつた。

と好意的に評している。顧農氏によれば、玄学に耽溺しないことと、簡潔な文章（古文）をかくことと、経世の才があることは、イコールでむすびつけやすいのだろう。

だが、ほんとうに、そうみなしてよいのだろうか。私はそうはおもわない。張習孔の評言（高古にして卓拔）や顧農氏の議論（行文にかざりもない）は、裏読みすると、羲之は美文を得意にしていなかったと解せなくもない。じつさい、右のような書簡文をよむかぎり、羲之は美文作成能力がおとつていたといわざるをえない。それゆえ私は、張習孔や顧農氏の評言は好意的なものにすぎ、実態としては、羲之は美文がかげず、高古な行文しかつづれなかったのだらうと解する。そしてそれは、美文を重視した六朝当時にあつては、羲之は二流の文人にすぎなかつたということを意味しよう。羲之の文を「八代の衰をすくつた」韓愈と同列、いやそれ以上のものとみなすなんて、周回おくれの走者を先頭と見あやまるようなもので、とんでもないことだ。<sup>15</sup>

羲之が美文をかけなかつたなんて、どうしてそんなことがいえるのか、と反論が出てくるかもしれない。そこで、羲之が美文をかけなかつた一証拠として、以下に対偶率の一覧表をかがけてみよう。羲之の主要な書簡文

ついでに「臨河叙」「蘭亭集序」「父墓前自誓文」もと、そして比較のために、さきにみた桓温の「薦謙元彦表」について、対偶率を計算してみた。すると、つぎのようになった。

作品名	句数	対偶句	対偶率%
報殷浩書	25	0	0
遺殷浩書	95	8	8
与会稽王牋	99	8	8
与尚書僕射謝安(尚)書	104	4	4
与吏部郎謝万書	39	4	10
誠謝万書	15	2	13
父墓前自誓文	33	4	12
臨河叙	27	4	15
蘭亭集序	63	14	22
桓温薦謙元彦表	71	42	59

羲之の作品だけでは、対偶率の低さが実感できないかもしれないが、同時代の桓温とくらべると、低さがよく了解できることだろう。羲之の作でいちばん対偶率がたかい「蘭亭集序」でさえ、わずか22%にすぎず、桓温表の59%よりはるかにおとつている。<sup>16)</sup>つまり羲之には、美文とよべる作はないのである。

羲之がいきていた東晋のころは、齊梁のころとくらべると、まだあまり文章の美文化がすすんだ時代ではなかった。しかしそれでも、あの華麗な陸機や潘岳の文学(約五十年まえ)を経過しているのであるから、もうすこし

対偶に意識的であつてもよさそうなものだ。こうかんがえると、やはり羲之は美文意識にとほしかった、といわざるをえない。これを要するに、羲之は美文をつづれなかつたこと断じてよからう。

では、なぜ羲之は美文をつづれなかつたのか。それは、特別な理由があるわけではない。文才にめぐまれなかつたから——それだけのことだろ。なぜそついでるのかというと、『晋書』の記事から推察できるのである。すなわち『晋書』の列伝をよんでみると、名だかい文人の伝には、「文章は世に冠たり」「善く文を属る」等の記述がしばしばみえている。たとえば『晋書』列伝から、羲之とちかい時代の人物をあげれば、

〔潘岳伝〕姿儀美しく辞藻は絶麗たり。

〔陸機伝〕少くして異才有りて、文章は世に冠たり。

〔左思伝〕貌は寝くく口は訥なれども、辞藻は壯麗たり。

〔郭璞伝〕言論に訥なれども、詞賦は中興の冠たり。

〔盧諶伝〕老莊を好み、善く文を属る。

〔孫綽伝〕博学にして、善く文を属る。

〔袁宏伝〕逸才有りて、文章絶美たり。

などだ。これによつて、彼らはいずれも文才にめぐまれていたことが推測されよう（右の七人は、いずれも『文選』に作品が採録されている）。

ところが羲之に関しては、そうした字句がみえない。羲之伝のはじめの部分を紹介すれば、

羲之幼訥於言、人未之奇。年十三、嘗謁周顛、顛察而異之。時重牛心炙、坐客未噉、顛先割啗羲之。於是始知名。及長、弁瞻、以骨鯁称。尤善隸書、為古今之冠。論者称其筆勢、以為飄若浮雲、矯若驚龍。

羲之は幼少のころ訥弁だったので、人びとは才があるとおもわなかった。十三歳のとき周顛に謁するや、顛は羲之の異才ぶりをみとめた。当時は牛心の焼肉を珍重していたが、座客らがそれをたべぬうちに、顛は牛心をきりとりて羲之にたべさせた。これによって羲之は、ようやく名をしられたのである。成長するや、弁舌さわやかであり、剛直ぶりでも賞賛された。とりわけ隸書がたくみで、古今の冠とされた。批評家が羲之の筆勢を評するや、浮雲のように飄々としており、驚龍のごとくかけあがる、とかたったという。というものだ。羲之は「幼少のころ訥弁だった」だったという。やがて成長すると、「弁舌さわやかであり、剛直ぶりでも賞賛された」人物となった。そして「とりわけ隸書がたくみで、古今の冠とされた」という特技があった、とのべるだけ。つまり『晋書』編者は、羲之には「文章は世に冠たり」や「善く文を属る」などの属性はなかった、と判断しているのである。そして私見によれば、その『晋書』編者の判断はただしかったといふべきだろう。

じつさい羲之は生前、これといった詩文の名篇はのこしていない。「蘭亭集序」があるではないか、といわれるかもしれない。だがこの作は著名ではあっても、すでにおおくの指摘があるように、それほどすぐれた文章ではない（そもそも偽作の疑いさえ存する<sup>17</sup>）。じつさい『文選』も採録していないのだ。さらに羲之は、当時の代表的な文学ジャンルだった辞賦の類を一篇ものこしていないし、『全晋文』には羲之の「用筆賦」をあげるが、これは後世のひとの偽作である<sup>18</sup>、詩も蘭亭のときの作しかのこっていない。このように、本伝に「善く文を属る」と称されておらず、またじつさいに名篇をものしていない以上、羲之は一流の文人とは称しがたい男だったと解すべきだろう。これを要するに、天は二物をあたえず、天は羲之に書の才はあたえたが、文の才はあたえなかったのである。

ただ「天が文の才をあたえなかった」というだけだと、あまりにそつけないかもしれない。もうすこし、それらしい理由をかんがえてみると、羲之が詩文にすぐれなかったのは、彼の出自も関係していたのかも知れない。すなわち「王と馬と天下を共にす」る東晋にあつては、羲之が属する琅邪の王氏は特別な一族だった。なにしろ、政治の王導や軍事の王敦をトップに、のきなみ朝廷の高官に名をつらねた名族である。つまり羲之は、亡国の文人たる陸機や、中流貴族出身の潘岳とはちがって、生まれながら高貴のひとだったのだ。

それゆえ羲之には、文学の創作力をみがき、その能力で立身しようという意欲も必要性も、まったくなかったろう。そうであれば、巧緻な対偶でひとをおどろかさうとか、博識な典故技巧によってあつといわせようとか、そんな文学的な野心もさらさらなかったにちがいない。「詩や賦をつまくつきたつて、それがなんだというのか。そんなもの、配下の者にかかせばいいじゃないか」。これぐらいの考えだったのだろう。このように羲之は、もともと文学の才がとほしかったうえに、創作力をみがこうとする意欲もなかった。そうであれば、羲之の文学創作が卓越しなかったのも、とうぜんのことだったのである。

注

(1) 中田勇次郎『王羲之を中心とする法帖の研究』(二玄社 一九六〇)の第七章、上田早苗「王羲之の知問」(『東洋藝林論叢』平凡社 一九八五)など。

(2) 個々の帖の番号は中田同書(注1)のものを使用した。『淳化閣帖』八20とあれば、該帖は『淳化閣帖』巻八に収録され、中田同書では20の番号をふられている、という意味である。引用にさいしては、張俊之『王羲之』、『王羲之詞彙研究』等により、尺牘の字を一部あらためたり、適宜、前後を略したりしているので、ご注意いただきたい。なお翻訳にさいしては、



森野繁夫・佐藤利行『王羲之全書簡』（増補改訂版 白帝社 一九九六）等を参考にした。

(3) 索靖「月儀帖」の文は釈文の困難さもあって、よみにくい箇所もすくなくない。正確な釈文は、これからの課題だろう。そうした努力の一環として、丸山裕美子「ロシア科学アカデミー東洋写本研究蔵 索靖月儀帖 断簡についての基礎的考察」（愛知県立大学文字文化財研究所年報「二〇一三」）は、標題のロシアの研究所が収蔵する断簡（正月、二月、三月のみ）を調査した結果にもとづき、従前の釈文との相違を指摘してくれている。

(4) 王羲之の月儀は「月儀書」と題され、「日往月来 元正首祚 太簇告辰 微陽始布 罄無不亘 和神養素」という六句が残存している（『太平御覧』巻二十九所引）。この六句は時候を叙したものであり、正月用文例の冒頭の部分（「時候のあいさつ」）だと推測される。なお、こうした六朝書儀の文化史的意義については、羲之研究の第一人者といふべき祁小春氏が、七百頁をこえるご労作『邁世之風 有関王羲之資料与人物的綜合研究』（石頭出版 二〇〇七）の第二・三章において、諸資料を網羅して周密な議論を展開されている。同書の議論によると、六朝の門閥士族は礼学を重視しており、儀軌にのっとりた書簡の書きかたも、そうした礼学の実践につらなるものだった。そして当時、書簡文の書きかたは、六朝士族における家法や家訓のひとつとして、そうとう重視されていた——ということのようだ。

(5) この三段構成という語は、私がわかいころ六朝の美文書簡をよんでいたとき、その書式を説明するにつかかったものである（拙稿「六朝書簡文の書式について 昭明太子十二月啓を中心に」『中国詩文論叢』第八集 一九八九）。今回はその三段構成が、羲之尺牘にも適用できそうだと指摘したわけだ。

ところが祁小春『邁世之風』（注4）は、この三段構成の書式には批判的である。すなわち、書簡の三段構成なるものは、書式の説明としてはおおざっぱすぎる。それは、古今どの時代の書簡文にも適用できるものであり、六朝書簡独自の特徴とはいえないからだ（一四一、一五〇頁）——と。だが私は、これには反論がある。拙稿がいう三段構成というのは、たんに「書簡は三つの部分よりなる」というものではない。六朝の美文書簡は、「時候のあいさつ、相手の安否、自分の近況」の三段よりなる、ということを主張したものである。

拙稿でのべたこの三段構成は、祁氏が主張されるように、ほんとうに古今どの時代の書簡文にも適用できるものだろうか。例として前漢の書簡、たとえば司馬遷「報任少卿書」(『文選』卷四二)をひもとくと、

太史公牛馬走司馬遷再拜言。少卿足下、曩者辱賜書、教以順於接物、推賢進士為務。

太史公のしもべの司馬遷、再拜してもうしあげます。少卿どのはさきに愚生に書簡をくださり、他人に接するには従順にし、賢能の士を推挙すべきことを、お教えくださいました。

とはじまっている。つまりこの書簡には、「時候のあいさつ」に該当するものはないのである。おなじく建安の曹兄弟や七子たちが交換した書簡にも、この「時候のあいさつ」を冒頭におく習慣はなかった。また唐代の韓愈の書簡文にも、「文集にいれるさいに省略された可能性もないが」その種のことははないようだ。

かつて右の拙稿でものべたことだが、六朝の月儀等に見える「時候のあいさつ」は、形式美、文飾、優雅さ等をよしとする、六朝独自の美学によって形成されたものであり、これ以前の書簡にはとほしかったものなのである。その意味で、書簡の三段構成(とくに「時候のあいさつ」)は、古今どの時代の書簡文にも適用できるようなものではないのである。

(6) 一般的に、相手への返書の場合では、「時候のあいさつ」は省略されることが多い。というのは、返書をかく場面を想像してみると、おそらく、目のまえに「相手の手紙や小荷物をはこんできた」信使がひかえていたことだろう。そのおなじ信使に返書をもちかえってもらうとすれば、返書は忽々につづらねばならない。そうしたとき、悠長な「時候のあいさつ」はとうぜん省略されることになる。

(7) じっさい、『右軍書記』のテキストによつては、この「卿大小佳帖」をその直前に位置する、「李母猶小小不和帖」<sup>391</sup>の一部だとみなすものもある。そして同帖の

李母猶小小不和。馳情、伏想行平康、郗新婦大都小差。

李母はまだすこし調子がよくありません。心配ですが、おいおい元気になるでしょう。郗さんのほうは、ほぼ回復

しました。

の直後に、この「卿大小佳」句をつづけている。

(8) 尺牘ジャンルのプライベートな性格については、いろいろな研究者が発言しているが、ひとつだけあげておく、興膳宏「尺牘の文化的意義」(『中国文学理論の展開』清文堂出版に所収。初出は一九九七)の説明がわかりやすい。

(9) 西晋の皇甫謐はこの五石散を常用して、一時、精神的に異常をきたしてしまった。『晋書』皇甫謐伝によれば、彼は服食のため元気がなくなり、はげしい喜怒の情緒におそわれた。そして刃物で自殺しようとしたが、叔母につよくとめられて、かろうじて制止することができたという。この種の中毒エピソードは、魯迅「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」(前出)や王瑶「文人与薬」(『中国の文人』「竹林の七賢」とその時代。大修館書店 一九九一)に口語訳がある)に、たくさん引用されている。やはり服食と、はげしい喜怒の情緒とは、ふかい関係があったのだろう。

(10) 松浦史子「漢魏六朝における山海経の受容とその展開」(汲古書院 二〇一二)第 部第一章「郭璞の文学・思想および日中の郭璞研究」に、日中における郭璞の研究史が要領よくまとめられている。

(11) この「与吏部郎謝万書」には、さきに見たような三段構成はみいだせない。すべてが「自分の近況」である。おもつに、三段構成、とくに「時候のあいさつ」などは、月儀ふうの形式的な書簡にこそふさわしいものだ。この作は、美辞麗句をつらねた月儀書簡でなく、気らかな閑適ふうな内容を有したもので、三段構成がみいだしにくいのはしかたなからう(もっとも、三段構成をとってはいたのだが、やなどは略されてしまった、という可能性もないではない)。

(12) 『楚辞』や漢賦の類は、おそらく羲之の読書範囲外だったのだらう。すくなくとも愛読書、つまり完全に暗記して自在に引用しうるレベルの書物、ではなかったらうとおもわれる。六朝のひとつでは、めずらしい読書傾向だといわねばならない。そういえば、羲之の作品リストには、華麗な印象をあたえる詩賦の類がみあたらないが、それもなるほど納得できるといふものだ。ただし例外もあって、『楚辞』や漢賦由来の語は、使用が皆無だというわけではない。たとえば、『楚辞』離騷に由来する「遊目」(ゆるゆると景色をながめやる、の意)の語が、『羲之尺牘』や『蘭亭集序』中に使用されている。

この語、他の文人からまんだのかもしれないが、羲之の使用する用語としては、めずらしいものといえよう。

- (13) 桓温には「上疏廢殷浩」という作もある。これは羲之「与会稽王牋」とどうよう、殷浩の北伐失敗を論じたものだ。この作は羲之牋と内容が似ており、比較の対象とするのには、こちらのほうが都合がよい。だが残念ながら、この作は「文選」に採録されておらず、当時の名篇だとは断言できない。そこでやむなく「薦譙元彦表」のほつをとりあげたのである。
- (14) これら王羲之書簡文への評語は、『中華大典 文学典（魏晋南北朝文学）』「王羲之の条からとってきたものである。以下もおなじ。

- (15) 美文とはいえぬ羲之の書簡文であるが、なぜか「顧農氏も指摘されるように」『晋書』王羲之伝には大量に引用されている。どうしてだろうか。顧農氏は修史家たちが「羲之の見解をよしとみとめたから」といわれる。だが私見によれば、やはり後世における書聖としての名声と、関係があるのではないかとおもふ。六朝の美文ふう文学観からみれば、羲之の書簡文は価値とほしきものとして、軽視されてもしかたないものだった。だが、唐太宗が羲之を書聖としてたたえたので、一種の特別待遇（といってよからう）として、本伝に採録されたのではあるまいか。清水凱夫「唐修晋書の性質について（下） 王羲之伝を中心として」『字林』第二四号 一九九六）も参照。

- (16) 王羲之の対偶は、字句の対応がルーズであって、あまり整然としたものではない。本稿ではゆるやかな対偶認定をしたが、もしきびしく認定したならば、対偶率はもっとさがるだろう。たとえば、「深謀遠慮」括弧至計（遺殷浩書）「暫廢虚遠之懐」以救倒懸之急（与会稽牋）「百姓流亡」戸口日減「刑名雖輕」懲肅実重（与尚書僕射謝安（尚）書）なども対偶と認定したが、ひとによっては「これは対偶といえるのか」と不審におもわれるかもしれない。こうしたものもふくめたのが、本文の対偶率なのである。これによっても、羲之の対偶意識の希薄さがうかがえよう。

- (17) 「蘭亭集序」の偽作説については、清水凱夫「新文選学——文選の新研究」の第五章「三 王羲之蘭亭集序不入选問題の検討」（研文出版 一九九九）が過去の研究史もふくめて、くわしく論じている。ちなみに、私が「蘭亭集序」をよんで気づいた行文上の特徴を、二つほどあげておこう。ひとつは、他の作にくらべて対偶がおおいことである。「蘭亭集序」

の対偶率は22%。他の羲之書簡文が0〜15%であるのにくらべると、おおすぎるように感じられる。もうひとつは、「或取諸懷抱、悟言一室之内、或因寄所託、放浪形骸之外」という隔句対がつかわれていることだ。羲之の信用できる文章作品中（本論で対偶率を計算した作品）で、隔句対を使用したのはこの一例だけであり、他ではつかわれていない。これもふしぎなことだ。以上の二特徴、些細なことであり、無視してもよいことかもしれないが、こつした、ふしぎな（羲之らしくない）特徴があることだけは指摘しておこう。

「付記」本稿は、春日井市の道風記念館が主催する平成二十九年度の講座において（五月二十六日〜六月三十日に六回）、講師として話をした内容にもとづき、それに大幅に加筆してなったものである。よい機会をお果たえくださった記念館の関係者、および話をきいてくださった方々に御礼もつしあげる。